

---

# ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のように～つながりを持たない短編集

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく！短編集〜ヒロインは変わる、時のように〜つながりを持たない短編集

### 【Nコード】

N8782C

### 【作者名】

ユーリ

### 【あらすじ】

この話はハヤテのごとく！の短編集です。綾崎ハヤテと生徒会娘5人それぞれの短編があります。

## 第00話：プロローグ

この小説は、私ユーリ初の短編集です。

この短編集には、ハヤテのごとく！のキャラクターである綾崎ハヤテと、生徒会娘の5人、瀬川泉・花菱美希・朝風理沙・春風千桜・霞愛歌がそれぞれ登場します。

恋愛に発展する話もあれば、恋愛にすら発展しないような話もあります。

それぞれの短編はだいたい前後編程度で終わります。

ただし、短編同士はつながりを持ちませんので、そのつもりでお読みください。

最初の短編は花菱美希です。

では、ごゆるりとお楽しみください。

第01話：花菱美希編　あの日からあなたに一目惚れ！？『前編』

白皇の生徒会娘の1人花菱美希は、自分の部屋ですっと考え事をしていた。

花菱美希

「ハア・・・どうして四六時中あの人の顔が脳裏に浮かぶのかしら・・・」

美希が考えている『あの人』とは、綾崎ハヤテの事である。

美希

「どうしてハヤ太君の顔が脳裏に浮かぶの・・・？やっぱり、あの事が原因なのかしら・・・」

美希はこの間、2人組の誘拐犯に誘拐され、そこをハヤテに助けられたのだ。

といっても、助けるキツカケを作ったのは朝風理沙なのだが。

その事もあって、美希は四六時中ハヤテの顔が脳裏に浮かぶようになっちゃったというワケだ。

美希

「どうしてハヤ太君の顔が脳裏に浮かぶんだろっ・・・これはもしかして・・・恋？」

少し顔が赤くなる美希。

美希

「そ、そんなバカな！！あくまでハヤ太君は、私のクラスメートの1人で、恋愛感情なんて・・・」

考えれば考えるほど、ハヤテの姿が大きくなっていく。

美希

「う・・・し、仕方ないわ・・・こんな所で考えてても始まらない・・・ナギちゃんの家に行こう・・・あ、あくまで自分の気持ちを確かめるだけだけどね！！」

そう言うと、美希は服を着替えて三千院家へと向かった。

美希は三千院家に着くと、呼び鈴を鳴らした。

ピンポン！

「はい。」

ドアが開いて、マリアが出て来た。

マリア

「あら、花菱さん？どうしたんですか？」

美希

「マリアさん、ハヤ太君いますか？」

マリア

「ハヤ太・・・？ああ、ハヤテ君の事ですね！今ナギとゲームをしています・・・呼んで来ましょうか？」

美希

「あ、はい・・・でもこんな所で待つのも何なので、客室で待たせてもらいます。」

マリア

「そうですか。ではお入りください。」

美希

「恐れ入ります。」

美希は屋敷の中へと入って行った。

ハヤテ

「珍しいですね、花菱さんが1人だけで来るなんて・・・」

ナギ

「で、何の用なのだ？」

美希

「ちょっと・・・1日だけハヤ太君を貸してほしいというか・・・その・・・」

マリア

「要するに、デートのお誘いってワケですか？」

美希

「んなあつ!？」

美希は一気に顔が赤くなった。

美希

「ち、ちがうですよマリアさん!わ、私がハヤ太君を貸してほしいのは、ち、ちがう理由で・・・」

美希はしどろもどろになっている。

もはやいつもの美希ではない。

ナギ

「いいぞ、花菱。1日だけハヤテを貸してやろう。」

美希

「え?い、いいのか？」

マリア

「はい。ちょうど今週の日曜日はハヤテ君に休みを出す予定だったので・・・ハヤテ君、いいですか？」

ハヤテ

「あ、はい。いいですけど・・・」

美希

「（ど、どうしょ・・・これじゃ私、まるで結果的にハヤ太君をデートに誘ってるようなものじゃないか！）じゃ、じゃあ、今度の日曜日・・・」

そう言いつと、美希は足早に走って行ってしまった。

そして、日曜日

ハヤテ

「花菱さん、待ちました？」

ハヤテが三千院家から出て来た。

美希

「イ、イヤ、私も今来たところよ・・・」

ハヤテ

「そうですか。じゃあどこに行きますか？」

美希

「え？え、え〜つと・・・ベタに遊園地とか？」

ハヤテ



「遊園地ですか。それなら少し遠い所にありますね。」

美希

「じゃあ、今からタクシーでも呼んで・・・」

ハヤテ

「必要ないですよ。」

美希

「えっ・・・？」

次の瞬間、美希はハヤテに背負われた。

ヒョイツ！

美希

「キャッ！ちよっ、ちよっとハヤ太君！？」

ハヤテ

「空を飛んだ方が速いので。行きますよ・・・疾風の・・・如く！  
！」

ドンッ！！

ハヤテは飛び出した。

美希

「ウ、ウソッ！！？」

数分も経たずに、ハヤテと美希は遊園地に着いた。

美希はさっきから放心状態である。

ハヤテ

「どうしたんです？花菱さん？」

美希

「ほえ！？イ、イヤ何でもないのよ、何でも！！」

美希は少し焦り気味だ。

ハヤテ

「じゃあ、どこに行きますか花菱さん？」

美希

「え、えっと・・・ベタにジェットコースターとか・・・かな？」

ハヤテ

「じゃあ、そこに行きましょう。」

そう言うと、ハヤテは美希の手を引っ張り走り出した。

美希

「あつ、ちよっ・・・」

順番はあっという間に回ってきて、ハヤテと美希はコースターに乗り込んでいた。

コースターはドンドン上がっていく。

美希

「う・・・（ヒナみたいに高い所は苦手じゃないが・・・さすがにこれはちよつとマズい・・・悲鳴を上げたくなくなるくらい高い・・・でもハヤ太君が隣にいるし、悲鳴を上げるワケには・・・）」

その時、ハヤテが美希の手をキュツとにぎった。

美希

「へッ!？」

ハヤテ

「花菱さん、怖いのなら悲鳴上げていいですよ。大丈夫です、ボクはこの事をバラしたりはしませんから。」

美希

「（ハヤ太君の手、こんなにも暖かい・・・こんなにも、暖かかったのか・・・）」

そうこうしている内に、コースターは上まで上がった。

美希

「（あー、もういいや・・・恥ずかしがっても仕方がない・・・上

げちゃおう。」

美希はそう思った。

そして、次の瞬間・・・

美希

「キヤアアアア！！！」

美希は思いっきり大きな悲鳴を上げた・・・

ジェットコースターを乗り終えたハヤテと美希は、昼食を取っていた。

メインは食べ終わり、食後のデザートを堪能しようというところである。

ハヤテ

「しかし、花菱さんがあれだけ大きな悲鳴を上げるなんて・・・よっぽど怖かったんですね？」

美希

「もう、からかわないでよ・・・」

美希は話題を変えようと思った。

美希

「そつえばハヤ太君、ヒナとはどこまで進んでいるのだ？」

ハヤテ

「ゴホッ!？」

ハヤテは飲んでいたコーヒーを吹き出してしまった。

ハヤテ

「な、何言ってるんですか花菱さん！ボクとヒナギクさんはそんな関係じゃないですよ……」

美希

「カワイイわね、ハヤ太君は……全く……ヒナも相当鈍いけど、ハヤ太君も負けず劣らず鈍いわね……」

ハヤテ

「花菱さんこそ、人の事言えないんじゃないですか？」

美希

「私が？何を言っているんだハヤ太君？私が恋愛事に鈍いなどという事はない……」

ハヤテ

「えい！」

美希

「!?!」

美希はハヤテに食後のケーキを食べさせられた。

パクッ！

モグモグモグモグ・・・

ゴックン。

美希

「ハ、ハヤ太君・・・！？」

ハヤテ

「ホラね」

ハヤテの天使のような笑顔に、美希は頬が赤林檎色に紅く染まった。

もはや顔は真っ赤っかである。

美希

「（ダ、ダメだ・・・やっぱり私、ハヤ太君の事が好きみたいだ・・・  
だったら、いつその事ハヤ太君に告白でもして・・・）あ、あの、  
ハヤ太く・・・」

ハヤテ

「あ、花菱さん！そろそろおあいそしましょうか？」

美希

「う、うん、そうね・・・（もっつ、私のバカッ！！）」

その後も美希は何度もハヤテに告白しようとしたが、悉く失敗してしまっただ。

ハヤテ

「イヤ、今日は楽しかったなあ・・・」

美希

「そうね・・・ハア・・・」

ハヤテ

「どうしたんですか、花菱さん？」

美希

「ほえ！？な、何でもないのよ、何でも！！（い、言えない・・・ハヤ太君に何度も告白しようとしてたなんて、とてもじゃないけど言えない！！）」

美希は少し俯いた。

ハヤテ

「・・・花菱さん。」

美希

「は、はい！！何でしょう！？」

ハヤテ

「これ、ボクの携帯電話の番号とメルアドです。」

ハヤテはメモ用紙を差し出した。

美希

「あ、ありがと……」

美希は少し赤面しながら、ハヤテの番号とアドレスを自分の携帯に入力した。

ハヤテ

「今日はスゴく楽しかったです。ありがとうございました、花菱さん。」

美希

「う、うん……こちらこそ……ね、ねえハヤ太君……」

ハヤテ

「はい？」

美希

「こ、こういうのって……世間的には何て言うのかな……?」

ハヤテ

「そうですね、デートじゃないですか？」

美希

「デート……（そっか……私今日、ハヤ太君とデートしてたん



だ・・・」

ハヤテ

「それじゃ、ボクはもう帰りますが・・・本当に送って行かなくていいんですか？」

美希

「ええ、帰りはS Pの人達に頼んであるから・・・」

ハヤテ

「そうですか。それじゃ、また明日学校で。」

そう言うと、ハヤテは高速で飛んで行った。

美希

「は、速っ・・・私今日、ハヤ太君と1日デートして・・・」

美希は次第に顔が紅くなる。

美希

「そっだ、今日は1人で帰ろう。余韻に浸りたいし・・・」

美希はS Pに電話をすると、走り出した。

これが間違いだったという事にも気づかずに・・・

美希

「くくく」

美希はご機嫌で歩いていた。

美希

「ハヤ太君との1日デート、楽しかったなあ・・・ヒナや泉には悪いけど、私もハヤ太君の事が好きになっちゃった・・・私もハヤ太君争奪戦に参加させてもらうわよ　ウフフ」

鼻歌を歌いながら美希が歩いていると、突然路地裏から車が飛び出して来た。

美希

「キャッ!!」

美希は間一髪で避けた。

美希

「ちょっと！危ないじゃないの!!」

そう言っつて運転手に文句を言おうとした美希がふと後部座席の方をのぞくと、そこには縛られている中学生くらいの女の子の姿があった。

美希

「あ、あ・・・」

美希が警察に連絡しようとして走り出そうとした、その時だった。

後ろからハンカチで口を塞がれたのは。

美希

「うつ！！」

美希はジタバタともがいたが、美希を羽交い締めにしたのは男のよ  
うで、全く身動きが取れなかった。

そうこうしている内に、美希の目はトロンとなっていく。

美希

「うつ、うつ・・・（こ、この匂いは・・・ク、クロロホルム・  
・ハ、ハヤ太君・・・た、助け・・・て・・・）」

美希はグッタリと気を失った。

美希を襲った男は美希が気絶した事を確認すると、美希を車の後部  
座席に放り込んだ。

そしてそのまま、車は何事もなかったかのように走り出した・・・

第02話：花菱美希編　あの日からあなたに一目惚れ！？『後編』

美希

「うっ、うっ・・・」

それからしばらくして、ようやく美希は目を覚ました。

美希

「ハッ・・・！！こ、ここはどこだ！？」

美希は起き上がった。

美希

「うっ、うぐっ・・・で、手が・・・」

美希の両腕は後ろ手にされ、縄で縛られていた。

美希

「手が縛られてる・・・私、一体どうなったんだ？そ、そうか！思い出した！確かあの時、突然飛び出して来た車とぶつかりそうになって、運転手に文句を言おうとしたんだ。そうしたら、後部座席に縛られている女の子が見えて、警察に連絡しようと思って走り出すとしたら、後ろから口を塞がれて・・・じゃあ、私は・・・誘拐された・・・！？」

美希は状況を理解したようだ。

美希

「おそらくあの女の子は、私を襲ったヤツとその仲間が身代金を要

求するための人質としてさらっていたのだろう・・・だとすれば私は、口封じのために拉致されたのか・・・いずれにしても、このままではマズい・・・ハヤ太君に連絡しなきゃ・・・」

そう言つと、美希はゆっくりと這つて行つた。

美希

「あつたわ、私のポシェット！後は・・・」

美希は後ろ手でポシェットに手を入れた。

美希

「あ、あつたわ！携帯電話・・・」

その頃、ハヤテは花菱家からの連絡を受け、美希を探していた。

ハヤテ

「花菱さん、まだ帰っていないなんて・・・一体何があつたのでしょよう？早く探さなきゃ・・・」

そう言つた時、電話が鳴つた。

ハヤテ

「花菱さんからだ！もしもし、花菱さん？」

美希

「あ、ハヤ太君・・・小さな声でお願い・・・」

ハヤテ

「はい。どうしたんですか？」

美希

「ゴメン、ハヤ太君・・・やっぱりあの時、ハヤ太君に送ってもらってれば良かったかも・・・」

ハヤテ

「って事は、まさか・・・!!」

美希

「ええ・・・今私、女子中学生を誘拐した2人組に捕まっちゃってるの・・・」

ハヤテ

「ええ!!それで、状況は？」

美希

「私は両腕を後ろ手で縛られているわ。幸い体と両足は縛られてないから、こうやってハヤ太君に連絡できたの。どうもここ、何かの倉庫みたいなよね。さっき2人組の声が聞こえていたわ。きっと、身代金を要求していたんでしょうね。」

ハヤテ

「何か見えませんか？」

美希

「え、えっと・・・」

美希は立ち上がった。

美希

「『田畑建設』って看板が向こうの方に見えるわ・・・」

ハヤテ

「田畑建設ですか・・・わかりました、待っていてください！今から助けに行きますから！！」

美希

「ええ・・・待ってるわ・・・」

ハヤテは電話を切ると、聞き込みを開始した。

一方、美希はハヤテの事を考えていた。

美希

「待ってる、か・・・私、やっぱりハヤ太君の事が好きなんだろうなあ・・・こんな状況に置かれても、必ずハヤ太君が助けに来てくれるって信じてる・・・」

美希がそんな事を考えていると、倉庫の扉が開いた。

ガチャッ・・・

美希

「!!」

中年未満くらいの男女が中に入ってきた。

「目が覚めたようだな、お嬢ちゃん・・・」

「さあ、こっちに来なさい。」

美希

「・・・」

美希は黙って従った。

その頃ハヤテは、聞き込みを終え、必死に走っていた。

ハヤテ

「早く花菱さんを助けなければ・・・あれ？何でボク、花菱さんの事を心配してるんだろう・・・？もしかしてボクは、花菱さんの事が・・・好き・・・？」

そんな事を考えながら、ハヤテは走った。



同じ頃・・・

美希は誘拐された女の子と同じ部屋に連れて来られていた。

美希は手足と体をロープでグルグル巻きに縛られて、床に座らされている。

女の子の方は、縛られた状態でイスに座らされている。

「んっ、んんっ・・・」

女の子は暴れている。

すると、男が拳銃を女の子に突きつけた。

ジャキ！

「！！」

女の子は黙る。

「さて、身代金の要求は済ませたし、後はコイツをどうするかね？」

そう言っつて、男は美希の方を見る。

美希

「フン、政治家の娘の私にこんな事してただですむと思っつなよ？」

美希は言っつた。

「ヘエ、オマエ政治家の娘なのか？」

「聞いた事あるわ。初期の内閣総理大臣の孫だとか・・・」

美希

「そつだ。それがどうかしたか？」

「そつか。それなら好都合だ。オマエの親からも身代金をせしめてやる。さあ、電話番号を教えな。」

男は言った。

美希

「アホか。私がそんな事を簡単に教えると思うのか？」

「そつかい。なら腕ずくで教えてもらおう。この子がキズつくのを見たくないや、電話番号を教えな。」

男は女の子にナイフを向けた。

美希

「ひ、卑怯だぞー!!」

「卑怯で結構。オレ達は誘拐犯なんだからな。」

「さあ、サッサと教えなさい。」

美希

「くっ・・・わかった・・・」

美希はおとなしく番号を教えた。

「さてと、電話もかけ終わった事だし、もうオマエ達の役目は終わりだな。」

「かわいそうだけど、あなた達には消えてもらいましょう。」

美希はその言葉に猛反発した。

美希

「オマエ達、それでも人間か！？このクズ！！人間として最低だ！！ふざけるな・・・！！！」

「うるさい小娘だ。」

そう言うと、男は美希の口にガムテープを貼った。

美希

「んゝ、んゝ！！！」

「これで静かになったわね。」

「ああ。じゃあ、そろそろ始末するか。」

男は美希に拳銃を向けた。

美希

「ん、んん・・・（イヤ・・・まだ死にたくない・・・やっと自分の気持ちに気づいたのに、こんなところで終わりたくない！！助けて、ハヤ太君・・・）」

次の瞬間、美希は精一杯叫んだ。

美希

「んっ！！！！（ハヤ太君っ！！！！）」

その時だった。

突然、声が聞こえてきたのは。

「そこまですよ。」

「だ、誰だ！？」

男は叫ぶ。

声の主は、ゆつくりと中に入って来た。

それは、美希が待ちわびた人だった。

ハヤテ

「遅くなつてすみません、花菱さん。」

美希

「（ハ、ハヤ太君・・・）」

美希は自然に瞳が潤んだ。

ハヤテ

「よくも花菱さんを怖い目に遭わせましたね・・・許しませんよ！」

そう言うと、ハヤテは驚くべき瞬発力であつという間に2人を倒してしまった。

その後、ハヤテが呼んだ警察によって2人組は逮捕され、美希と女の子は無事に保護された。

ハヤテ

「大丈夫でしたか？花菱さん。」

ハヤテが聞いてくる。

美希

「あ、うん・・・どこもケガしてないわ・・・」

ハヤテ

「そうですね、良かったです。」

ホッとするハヤテ。

その笑顔に、美希は見惚れた。

美希

「あ、あの・・・ハヤ太君・・・」

ハヤテ

「はい、何ですか？」

ハヤテは笑顔で聞き返す。

美希

「（言わなきゃいけない！勇気を出して、言わなくちゃ・・・！！）」

」

美希はついに決心した。

美希

「私、花菱美希は・・・ハヤ太君・・・いえ、綾崎ハヤテ君の事が・・・好きです！！」

美希はハヤテに告白をする。

美希は顔が真っ赤になり、下を向いた。

ハヤテ

「顔を上げてください、花菱さん。」

美希は顔を上げる。

ハヤテ

「ボクも花菱さん・・・いえ、美希さんの事が好きです。今日やっとこの気持ちに気づけた・・・ボクと、おつき合いしていただけたま

せんか？」

その言葉に、美希は涙を浮かべながら言った。

美希

「はい・・・喜んで・・・これからよろしくね、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「こちらこそよろしくお願いします、美希さん・・・」

ハヤテと美希は抱き合い、キスを交わした。

その後2人は警察で事情聴取を受けた後、手をつないで途中まで一緒に帰った。

もちろん、この後2人が交際発表をした時、ナギ達が驚いたのは言うまでもない・・・

例の事件から2年後、ハヤテと美希は結婚する事となった。

式場は、白皇学院内にある教会だった。

ハヤテ

「どうでしょうか、お嬢様・・・？」

ハヤテは新郎なので、タキシードを着ている。

ナギ

「ウム！そのタキシード、良く似合っているぞハヤテ！」

ハヤテ

「あ、ありがとうございます・・・」

マリア

「それにしても驚きですわ。まさかハヤテ君が花菱さんと結婚する事になるなんて・・・ねえ、ナギ？」

ナギ

「ああ、あの時の事が誤解だとわかった時は悲しかったが・・・今の私はオマエの幸せを一番に考えてるぞ！」

ハヤテ

「お嬢様・・・」

その時、左側の扉から会話が聞こえてきた。

「ちよつ、ちよつと待ってみんな・・・私、まだ心の準備が・・・」

「もっ、何今さら恥ずかしがってるのよ！ホッラッ！！」

ドンッ！！

美希

「わわわっ・・・」



ハヤテ

「美希さん!!」

左側の扉から、ヒナギクに押された美希が入って来た。

美希はウェディングドレスを着ている。

美希

「ハ、ハヤテ君・・・どうかな？私の格好・・・」

ハヤテ

「とても良くお似合いです、美希さん。」

美希

「あ、ありがとう・・・」

美希は赤面した。

「さて、そろそろ式を始めようか？」

ハヤテ

「そうですね・・・って、ああ!!あなたは神父さん!？」

そう、ハヤテ達に声をかけたのは、幽霊神父リンだった。

ハヤテ

「何してるんですか、こんな所で・・・」

リン

「無論、本職をするために来たのだ。」

ハヤテ

「あのですね・・・そもそもあなたは死んでいるんですから、皆さんには見えないハズでしょう？」

リイン

「それなら心配いらん。伊澄君とソニア君に、見えるようにしてもらったからな。」

ハヤテ

「あ、そうなんですか・・・」

リイン

「そういう事だ。さあ、早く始めようではないか。」

ハヤテ

「はい。」

その後、式は滞りもなく進み、最後の誓いの儀式まできた。

リイン

「では、誓いのキスを。」

ハヤテ・美希

「はい。」

ハヤテは美希と向かい合う。

ハヤテ

「美希さん。」

美希

「ハヤテ君。」

ゆつくりと2人の顔が近づいていく。

そして、ついに2人の唇が重なった。

その瞬間、出席者全員から祝福の言葉が投げかけられた・・・

「末永くお幸せに！！」

綾崎ハヤテと花菱美希・・・

2人の未来に、幸あれ。

花菱美希編・完

### 第03話：朝風理沙編／巫女が執事に恋した日『前編』

白皇学院のある教室で、男女2人が向き合っていた。

少女は賢明に何かをお願いしている。

「頼む！お願いだ！！私の宿題を手伝ってくれ！このままでは、私は・・・」

「わかりましたよ・・・で、どこでやりますか？」

「そ、そうだな・・・じゃあ、図書館でやるか？」

「そうですね、朝風さん。では、行きましょうか。」

少年は微笑んだ。

「う、うん、そうだなハヤ太君・・・（ハア・・・どうして、こんな事になったんだ・・・）」

少女は顔を赤らめながら、ため息をついた。

少年の名は綾崎ハヤテ、少女の名は朝風理沙。

どうして、こういう話になったかという・・・

白皇学院生徒会娘の1人、朝風理沙。

彼女は今、自室でビデオを観ていた。

朝風理沙

「フフフ・・・ハヤ太君のこの姿、何度観ても飽きないなあ・・・」

理沙が観ているのは、彼女のクラスメート、綾崎ハヤテが女装した姿で白皇学院内を走っている場面が映っているビデオである。

『ある事件』によって理沙達の楽しみの場所動画研究部部室は一時壊滅したが、一部のテープは部員である理沙達がそれぞれ持っていたのだ。

理沙は休みの日になると、そのテープを何度も繰り返し観ているというワケだ。

これは、彼女の一時の楽しみでもある。

理沙

「そういえば、この前ハヤ太君が私のマイクを返しに家に来た事があったっけ。あの時は悪い事したなあ・・・あの時のハヤ太君、純粹でカワイくって・・・って、あれ？何で私、さっきからハヤ太君の事ばかり考えてるんだろう・・・？」

理沙は少し考える。

理沙

「あ、そうか！ハヤ太君が格好のイジリ相手だからだ！」

と、こう安直な答えを出した理沙。

「おい、理沙！晩ゴハンじゃぞ！」

理沙

「あ、はい！そうだ、何でハヤ太君の事が気になるのかをおじいちゃん達に相談してみよう・・・まあどうせ、たわいもない理由なんだろうけどね・・・」

こう思いながら、理沙は食卓へと向かった。

この後、彼女の気持ちに変化が現れるとも知らないで・・・

理沙は食卓で、祖父と両親に相談を試みた。

「それで、その『ある少年』の事ばかり考えておると・・・そういう事じゃな、理沙？」

理沙

「うん。まあどうせ、たわいもない理由だとは思っけどね。」

そう言う理沙に、祖父は思いがけない事を言った。

「それはのう、理沙。オマエがその少年に惹かれておるからじゃ。」

理沙

「え？」

理沙は目が点になった。

「じゃから、オマエがその少年に恋をしておると言っておるんじや。」

理沙

「・・・」

しばしの沈黙。

理沙

「ええええええ！！？」

理沙は驚いた。

「何じゃ、その反応は・・・やはりそうなのか？」

理沙

「ち、ちがう！わ、私がハヤ太君に恋をしているなどという事はない！！！」

理沙はあわてて反論した。

「ん？ワシ、『ハヤ太君』などとは一言も言っておらんが？」

理沙

「あ・・・！！！」

理沙は墓穴を掘ったようだ。

「ところで、そのハヤ太君とは、この前オマエのマイクを返しに来て、ワシが盗人と間違えてしもつたあの少年の事か？」

理沙

「え！？う、うん・・・そうだけど・・・」

「理沙、がんばれよ。」

理沙

「え！？う、うん。」

理沙は少し赤くなりながら料理を食べ終わると、2階の自室へと上がって行った。

それを見ながら、おじいさんはこつつぶやいた。

「若い者はええのう・・・」

理沙はおフロを済ませ自室に上がると、ベッドに突っ伏した。

理沙

「私、おじいちゃんの言う通りハヤ太君に対して恋をしているのだからか・・・？」



理沙は少し顔が赤くなる。

理沙

「ま、そんなワケがないわな。あゝ、考えるのも面倒くさい！もう寝よ・・・」

理沙は布団を頭からかぶると、スースーと寝息を立てた。

机の上に置いてある、『ある物』には手をつけないまま・・・

三千院家の執事綾崎ハヤテは、今日も白皇学院に登校した。

ちなみに彼が世話になっている三千院ナギは、例のごとく引きこもりで休みだ。

ハヤテ

「ハア・・・今日もお嬢様は学校に来てくれないなあ・・・」

ハヤテがため息をついていると、後ろから少女達が声をかけてきた。

瀬川泉

「おっはよ、ハヤ太君」

花菱美希

「おはよう、ハヤ太君。」

理沙

「フッフ、おはようハヤ太君。」

ハヤテ

「おはようございます、瀬川さん、花菱さん、朝風さん。」

美希

「その様子だと、今日もナギちゃんは引きこもりのようね？」

ハヤテ

「ええ、恥ずかしながら……ところで、どうして皆さんはこんな朝早くから登校を？」

理沙

「それはだね、ハヤ太君……私達が白皇学院の平和を守るようヒナから言いつかっているからだよ。」

ハヤテ

「そうなんですか？」

泉

「そだよーハヤ太君 瀬川泉、委員長レッド!!」

美希

「そうよハヤ太君。花菱美希、副委員長ブルー!!」

理沙

「フッフ！朝風理沙、敵か味方が風紀委員ブラック!!」

泉・美希・理沙

「3人合わせて、ザ・生徒会役員!!!」

ドーン!!

ハヤテ

「楽しそうだな。」

理沙

「まあ、ハヤ太君には今空いているコバルトブルーの称号を・・・」

ハヤテ

「いいません。ってかコバルトブルーって某マンガのドリル兄さんじゃないですか。」

美希

「ならばハヤ太君にはシャルトルズイエローの称号を・・・」

ハヤテ

「それもいいません。それにシャルトルズイエローはライフルをぶっ放す女の子です。」

泉

「二八八、さっきの話は冗談なんだよね。」

ハヤテ

「やはり冗談でしたか・・・」

美希

「本当は私達、朝早くから生徒会の仕事をするようにヒナに言われ

たのよ。」

ハヤテ

「その仕事って？」

理沙

「今度やる、白皇学院の生徒全員参加のマラソン大会の資料整理だ。」

「

ハヤテ

「うわゝ、また大変そうですね。良かったらボクも手伝いましょうか？」

泉

「えゝ良いのハヤ太君ゝ」

美希

「ハヤ太君が来ると、仕事も何かと早く終わるから助かるわ。オマエもそう思うだろ理沙？」

理沙

「（ハヤ太君が・・・私達の手伝い・・・）」

美希

「おい、理沙？」

理沙

「ふえ！？あ、ああ、そうだな。ハヤ太君が手伝ってくれれば非常に助かるよ。」

ハヤテ

「でも、皆さんもちゃんとやっってくださいよ?」

泉

「了解なのだ」

美希

「努力する。」

理沙

「・・・以下同文だ。」

ハヤテ

「皆さん・・・」

こんな風に談笑しながら、ハヤテ達は生徒会室へと向かった。

授業が終わって放課後、ハヤテ達は教室で資料をまとめていた。

泉

「やっぱりハヤ太君がいると仕事もはかどるね」

美希

「全くだ、いつその事生徒会役員になったらいいのに。」

ハヤテ

「ハハハ、考えておきますよ。」

美希

「そういえば、明後日までに宿題出さなきゃいけなかったのよね？」

理沙

「（・・・え？）」

泉

「そうそう、あの難しい宿題！でも泉はもう終わったよ！」

美希

「私は今日の晩にでも終わらせるつもりよ。アレやらないと、今度こそ雪路に怒られるからな。」

理沙

「・・・」

理沙は恐る恐る、自分のカバンを開けた。

そして中のプリントを見ると、そこには白紙のプリントが・・・

理沙

「（ウ、ウソ！？１ページもできていないではないか！！）」

理沙の顔は青ざめた。

理沙

「ハハハ・・・だ、大丈夫だ私！こんな時こそ３人力を合わせて・・・」

そう言つて理沙が振り返ると、そこにはハヤテしかいなかった。

理沙

「あ、あれ？泉と美希は・・・？」

ハヤテ

「2人共ヒナギクさんに資料渡しに行つちやいましたよ？あ、そういえば、ボクもまだ終わつてないんですよ、宿題・・・」

その時、理沙がハヤテの両手を握った。

ギュッ！！

ハヤテ

「え？」

理沙

「た、頼むハヤ太君！私も宿題ができてないんだ！一緒に見て、手伝つてくれ！！でないと、私今度こそ雪路に怒られる！！」

ハヤテ

「え？え？」

理沙

「お願い・・・ハヤ太君・・・」

理沙の目は潤んでいる。

まるで何かを懇願するかのような。

ハヤテ

「わかりました、手伝います。あ、あの・・・そろそろ手を放していただけませんか？」

理沙

「・・・え？」

理沙はふと自分の手を見る。

ハヤテの手を握っている自分の手を・・・

理沙

「あ、あわわわわ！！ゴ、ゴメン！！」

理沙はあわててハヤテから手を放した。

その顔はリンゴのように真っ赤っかだ。

ハヤテ

「いえいえ、気になさらずに・・・で、どこでやります？」

理沙

「そ、そうだな・・・図書館はどうだ？」

ハヤテ

「良いですね。ちょうどボクも持って来てますし・・・そこでやりましょう。では行きましょうか、朝風さん。」

理沙



「あ、ああ、そうだな・・・（ど、どうしょ・・・ハヤ太君と2人つきりで勉強だなんて事になってしまったよぉ・・・）」

理沙は顔を赤らめながら、ハヤテと共に図書室に向かった。

図書館に着いてからも、理沙は一言もしゃべらなかつた。

たとえ相手がハヤテといえども、やはり異性と一緒に勉強するのは照れるものなのだろうか。

理沙

「（成り行きでハヤ太君と勉強するハメになってしまったが・・・やはり恥ずかしいものだな・・・）」

ハヤテ

「朝風さん、ここはどうしたら解けるんですかね？」

理沙

「（もしこのまま、あんな事やこんな事が起きたら・・・）」

ハヤテ

「あの、朝風さん？」

理沙

「は、はい！何でしょう！-！」

ハヤテ

「イヤ、ここはどうやってたら解けるのかと・・・」

理沙

「あ、ああ、そこは・・・」

理沙はハヤテに解き方を教えた。

ハヤテ

「なるほど、こうやればいいんですね。ありがとうございます」

理沙

「れ、例には及ばん・・・（ダ、ダメだ・・・このままでは間が保たん・・・何か他の話題はないのか・・・あ、そうだ!）ところでハヤ太君、ヒナとはどこまで進んでいるんだ？」

ハヤテ

「朝風さんまでその事聞くんですか？ボク達はそういう関係じゃありませんよ・・・」

ハヤテは即否定した。

ハヤテ

「だいたい、ボクにはかりそういう事を聞きますけど・・・朝風さんにはいないんですか？気になる人とか・・・」

ハヤテは理沙に質問した。

理沙

「え!？」

理沙は狼狽<sup>うろた</sup>えた。

理沙

「（ウ、ウソ・・・い、いきなりそんな事聞いてくるなんて・・・もしかして、これって脈あり？ だったら、今すぐにでも私のこの気持ち・・・）あ、あのハヤ太君・・・」

その時、理沙は3つの人影を目の当たりにした。

理沙

「（ゲッ！！ 泉と美希と・・・愛歌さん！？）」

理沙の眼に写ったのは、瀬川泉と花菱美希、そして霞愛歌だった。

理沙はマズいと思った。

泉はともかく、花菱美希と霞愛歌という『激Sコンビ』にこの状況を見られてもしたら、何を言われるかわかったものではない。

理沙

「（イ、イカン・・・早くこの場を離れなければ・・・早くハヤ太君に・・・）」

理沙が何かを言おうとする前に、ハヤテが声をかけた。

ハヤテ

「朝風さん、ここはあまり集中できそうにありません。場所を変えましょう。」

理沙

「そ、そうだな・・・（た、助かった）・・・」

幸い泉達に見つかる事もなく、2人はその場を後にした。

ハヤテ

「さて、どこでやりましょうかね・・・」

理沙

「・・・」

理沙は無言のままだ。

ハヤテ

「あ、そうだ。お屋敷でやらせてもらえばいいじゃないですか！それでいいですか朝風さん？」

理沙

「ほえ！？い、いいんじゃないか？」

ハヤテ

「じゃあ早速マリアさんにこの事を・・・」

ハヤテはマリアに電話をかけた。

ハヤテ

「もしもし、マリアさん？実はですね、ちょっと頼みたい事が・・・え？お嬢様がカゼを？はい、それで・・・わかりました。」

ハヤテは電話を切った。

ハヤテ

「朝風さん・・・どうやらお屋敷ではできそうにありません。どうしましょ？」

理沙

「そうなのか？だったら・・・私の家に来るか？」

ハヤテ

「え？」

しばらく沈黙が続く。

その沈黙を破ったのは、ハヤテだった。

ハヤテ

「朝風さんの家に？」

理沙

「あ、イヤ、別に深い意味はないんだが・・・」

理沙は狼狽うろたえた。

ハヤテ

「いいですよ。では今から参りましょうか。」

理沙

「そ、そうだな・・・（ど、どうしょ・・・ますます泥沼だぁっ  
！！）」

理沙は再び顔が赤リンゴ状態になっていた。

ハヤテと理沙は、朝風神社にたどり着いた。

途中、白皇のマラソン大会に関する話題で談笑していたので、理沙はいつもよりも早く着いた気がしていた。

理沙

「（ひ、非常に困った事になったぞ・・・もしおじいちゃんに見つかりでもしたら、何を言われるかわかったものではない！！見つからない内に、ハヤ太君を自室に案内しなければ・・・）」

しかし、運の悪い事にその人物の声が・・・

「おお、理沙！」

理沙

「ゲッ、おじいちゃん・・・」

「帰っておったのか！ん？」

そう言ったおじいさんの目が、ハヤテの方に向けられた。

ハヤテ

「こ、こんにちは・・・」

ハヤテは前の事もあってか、ビクついていた。

すると・・・

「・・・何と！！！！理沙が彼氏を連れて帰りおったあ！！！！」

おじいさんが叫んだ。

理沙

「イヤイヤちがつてば！なあ、ハヤ太君！！」

理沙はハヤテの方を向く。

ハヤテ

「・・・」

ハヤテ、無言。

理沙

「何でそこで黙るんだあ！！」

「おい、皆の者来い！！今宵は宴じゃ！赤飯じゃあ！！」

理沙

「何でそうなるんだ・・・」

理沙はうなだれた。

ハヤテ

「まあ、朝風さん。落ち着きましょうよ。」

理沙

「ハヤ太君が否定してくれないからじゃないか！」

ハヤテ

「すみません、まさかおじいさんがここまでボケ・・・もとい勘違いが激しいなんて・・・」

理沙

「（ああ、もうダメだぁ・・・）」

理沙はガツクリとなった。



#### 第04話：朝風理沙編／巫女が執事に恋した日『中編』

理沙は自室でハヤテと勉強をしていた。

問題の答えを教えてもらうたびに、理沙はドキドキしていた。

理沙

「（ハヤ太君と2人きりで勉強だなんて・・・嬉しい反面、モノスゴく恥ずかしいよ・・・ああ、やっぱり私はハヤ太君に恋をしているのだろうか・・・？）」

理沙が考え込んでいると、部屋のドアが開いて母が入って来た。

「理沙ー、そろそろ晩ごはんよー。」

理沙

「わかった。」

「綾崎君も食べていく？お鍋なんだけど。」

ハヤテ

「あ、はい。まだもう少しかかりそうなので、お言葉に甘えます。」

ハヤテは食卓で、朝風家の夕食にお邪魔していた。

「しかし、理沙が彼氏を連れて来るとはのう・・・」

「てつきり理沙は男に興味がないとばかり思っていたよ。」

理沙

「だからちがうんだってば！ハヤ太君も何か言ってくれ！」

ハヤテ

「・・・」

理沙

「だから何で黙るんだあ！！」

「照れる事はないぞい、理沙。こんな好青年ならワシらも大歓迎じやて！」

「ハヤテ君、不束者だが妹の事をよろしく頼むよ。」

ハヤテ

「ハ、ハア・・・」

理沙

「勝手に話を進めるな！ハヤ太君も何返事してるんだあ！！」

そんなこんなありながら、時間はあっという間に過ぎた。

その後の勉強も順調に進み、両者の宿題も片づこうとしていた。

しかし、理沙には宿題よりも難解で片づかない問題があった。

ハヤテの事についてである。

ハヤテと接していく内に、内心理沙はドキドキしっぱなしになっていた。

いつもの理沙なら、『自分がハヤテに恋心を抱くなどありえない』  
とでも考えて片づければ済んだであろう。

しかし、今は状況がちがう。

ハヤテに宿題の手伝いを頼み、ハヤテの手をにぎって赤面し、挙げ  
句の果てには家族に彼氏と間違えられる始末・・・

しかも、さっきまでフロに一緒に入っていたものだから（もちろん  
家族の差し金。その後理沙はのぼせてハヤテに介抱された）、余計  
に今の状況は堪えるものなのだ。

理沙

「（どうなっているんだ・・・時間が経つほどハヤ太君を意識して  
しまってきている・・・何なんだ、これは・・・こんなの、いつも  
の私ではない！）」

理沙は考え込み始めた。

理沙

「（やっぱり私は、ハヤ太君の事を・・・？ちがうちがう、ありえ

ん！！私がハヤ太君に恋心を抱くなどありえないんだ！！私はこんなキャラではなかった！こんなキャラではなかったハズなんだ！！なのに・・・それなのに・・・」

ハヤテ

「・・・風さん。」

理沙

「（そういえば私、今日はずっとハヤ太君に助けてもらっていたなあ・・・ハヤ太君、華奢でカワイイのに、いざとなるととても頼もしくて・・・ヒナや泉が惚れるのもうなずけるよ・・・）」

ハヤテ

「朝風さん？」

理沙

「（でも、ハヤ太君には、泉やヒナみたいなカワイイ娘の方が似合っている・・・私みたいなカワイくもない娘が、ハヤ太君を好きになるなんて、甘すぎるんだ・・・）」

ハヤテ

「朝風さん！！」

理沙

「ほ、ほえ！？」

理沙はビクツとなった。

ハヤテ

「どうしたんですか？」

理沙

「な、何でもないんだ！何でも・・・」

ハヤテ

「朝風さん。少し頼みがあるんです。今からボクと・・・」

理沙

「（え？え？）」

ハヤテ

「ビデオ屋にでも行きませんか？」

理沙

「ビ、ビデオ屋・・・？」

ハヤテ

「はい。代金はボクが払うので、何か面白い映画でも観ましようよ。」

「

理沙

「そ、そうだな・・・行こうか・・・」

ハヤテと理沙は、ビデオ屋に向かっている。

ちなみに、何に乗っているかというと・・・

自転車であつた。

無論、ハヤテは自転車を持って来ていなかったの、理沙の兄のを借りている。

理沙

「な、なあ、ハヤ太君・・・」

ハヤテの後ろの理沙がハヤテに話しかけた。

ハヤテ

「何です？」

理沙

「後何分くらいで着くんだ？」

ハヤテ

「うゝん、この速度だと・・・30分ぐらいで着きますかね？」

理沙

「そ、そうか・・・（・・・これは突っ込んだら負けなのだろうか・・・）」

理沙が突っ込みたくなるのも無理はない。

なぜなら、ハヤテは今・・・

通常では考えられないほどの速度を自転車で出していたからだ・・・

ハヤテと理沙は、1件のビデオ屋へとやって来た。

『ビデオレンタルVタチバナ』

理沙

「って、ここは・・・我が動画研究部部長の店ではないか？」

ハヤテ

「ええ。ボクはいつもここでビデオを借りているんですよ。さ、行きましょう。」

理沙

「え・・・あ、うん・・・」

ガーツ！

タチバナ

橋巨

「いらっしゃいませ〜！って、ハヤテか。」

ハヤテ

「こんにちは、ワタル君。またビデオ借りに来ました。」

ワタル

「そうか。って、そっちにいるのは生徒会の朝風さんじゃねえか？」

理沙

「（ギクッ！！）」

ワタル

「何か珍しい組み合わせだよな、ハヤテと朝風さんってのは・・・何かあったのか？」

ハヤテ

「はい。これこれこういう事情で・・・」

ワタル

「ああ、なるほどな。事情はわかったよ。で、ハヤテは何が借りたんだ？」

ハヤテ

「えっと、『アレ』を借りたいんで、そこまで案内してくれませんか？」

ワタル

「おいおい、ハヤテ本当にアレ借りる気か？まあ、ハヤテが観たいんなら文句は言わねえが・・・」

ハヤテ

「お願いします。少し遠い場所なので、朝風さんはサキさんと話でもしててください。」

理沙

「あ、ああ・・・」

ハヤテはワタルと一緒に奥へと歩いて行った。



サキ

「それにしても、ハヤテさんはすっかり若に懷かれてますね。」

理沙

「そうなんですか？」

サキ

「ええ、前に若が困っているところをハヤテさんが助けてくれたそうで。それ以来、若は『ハヤテみたいな男になる』って言ってるんですよ。若にとって、ハヤテさんはお兄さんのような存在なんですよ。ね。」

理沙

「へエ・・・（お兄さん、か・・・私にも兄はいるが、いまいちっで感じなんだよなあ・・・もし、ハヤ太君が兄だったら・・・って、何考えてるんだ、私は！？）」

理沙は妄想で顔が赤くなっていた。

ハヤテ

「朝風さ〜ん、お待たせしました。」

理沙

「何だ、早かったな・・・で、何借りたんだ？」

ハヤテ

「某有名ホラー映画です。」

理沙

「えええ〜！！！」

ハヤテ

「早く帰って観ましようよ。」

理沙

「だ、誰か助けてくれえ……」

理沙はハヤテに引っ張られて店を出て行った。

ワタル

「まいどあり〜。また来てくれよなハヤテ〜。」

ハヤテは遠くで手を振っていた。

サキ

「若、あの映画観て理沙さん大丈夫なんでしょうか？」

ワタル

「ちと不安だが、ハヤテが一緒なら大丈夫だろ。ハヤテ曰く『伊澄さんと一緒に退治してる妖怪の方が怖いですから』って言ってたし。」

サキ

「そ、そう思うのって……ハヤテさんだけなのは……」

ワタル

「ま、そつとも言うだろうな。」

ハヤテは理沙の部屋に着くと、早速ディスクをプレイステーション2に入れていた。

理沙

「な、なあハヤ太君・・・本当に観るのか・・・？」

ハヤテ

「大丈夫ですよ。所詮映像物ですし。」

理沙

「だから、私はそれが怖いんだってばあ！！」

理沙は必死に抗議するが、それもむなしくハヤテはビデオのスイッチを入れた。

映画が始まった。

内容は、古い洋館に迷い込み脱出できなくなった少年少女達が、怪物と戦いながら脱出口を探すという、聞いた事があるようなないような話だった。

ハヤテは平然として観ているが、理沙はそうではなかった。

怪物が出てくるたびに、理沙はブルブルと震えていた。

理沙

「・・・（こ、怖い・・・怖くてたまらない・・・悲鳴を上げたい・・・でも、ハヤ太君が隣にいるし、悲鳴を上げるワケには・・・）」

その時、ハヤテが理沙の右手をにぎった。

理沙

「え？」

ハヤテ

「怖いなら悲鳴を上げてても良いですよ、朝風さん。大丈夫です、ボクはこの事をバラしたりしませんから。」

ハヤテは微笑んだ。

理沙はそれに見惚れた。

理沙

「（ハヤ太君の手、とても暖かい・・・こんなにも暖かいのか・・・あゝ、もういいや・・・怖がってても仕方がない・・・上げちゃう。）」

次の瞬間、理沙は思いつき悲鳴を上げた・・・

理沙

「キヤアアアアアアアア！！！」

2人が映画を観終わるまで、理沙は悲鳴を上げまくっていた。

さらに、それだけではなく・・・

ハヤテ

「あの、朝風さん・・・」

理沙

「何だ？」

ハヤテ

「そろそろ離れてくれないと、その・・・む、胸が・・・」

理沙

「え！？あ・・・！！」

そう、理沙自身は悲鳴を上げているだけだと思っていたらしく、自分がハヤテに抱きついている事には気づかなかったのだ。

理沙

「あわわわ！！ゴ、ゴメン！！」

理沙はあわててハヤテから離れた。

ハヤテ

「いえ、気になさらずに・・・」

お互いに顔が真っ赤になる2人。

しばらく沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは、ハヤテだった。

ハヤテ

「・・・朝風さん。」

理沙

「は、はい！！何でしょう!？」

ハヤテ

「これ、ボクの携帯電話の番号とメルアドです。」

ハヤテはメモ用紙を差し出した。

理沙

「あ、ありがと・・・」

理沙は少し赤面しながら、ハヤテの番号とアドレスを自分の携帯に入力した。

ハヤテ

「では、ボクはお嬢様が心配なので帰りますが・・・何かあったら、電話なりメールなりしてくださいね。」

理沙

「あ、ちよっ・・・」

理沙が言い終わる前に、もうハヤテは消えていた。

理沙

「は、速っ・・・とりあえず、今日はもう寝よ・・・」

理沙はベッドへと突っ伏す。

しかし数分後、眠れなくなった理沙は美希の携帯に電話をかけた。

美希

「何よ理沙、こんな時間に・・・」

理沙

「悪いな、美希。こんな時間に電話して・・・実は、ある人の事について相談があるんだ・・・」

理沙はあえて、ハヤテの名前は伏せていた。

ハヤテの名を出したら、美希に冷やかされるのは目に見えているからだ。

美希

「そう。そんな事があったの・・・」

理沙

「ああ。」

美希

「理沙、単刀直入に言うわ。あなた、その子に恋をしているのよ。間違いないわ。」

美希も、理沙の祖父と同じ事を言ったのだった。

理沙

「やつぱりそうか。なら私はどうすればいいんだ？彼にはライバル

もたくさんいる・・・」

美希

「簡単な事よ、理沙。あなたもがんばれば良いのよ。」

美希は言った。

理沙

「わかった・・・私、がんばってみる！」

美希

「それでこそ理沙だ。」

理沙

「ありがとう美希！お休み！」

美希

「お休み。」

理沙は電話を切ると、ベッドで寝息を立て始めた。

美希

「理沙・・・がんばれよ・・・」

こうして、理沙はハヤテに想いを伝えようと決心した。

しかしこの時、理沙に魔の手が迫ろうとしている事に、彼女は気づいていなかった・・・



その日、理沙はいつものように、白皇学院に登校していた。

そして、白皇にちょうど着いたその時だった。

理沙の携帯が鳴ったのは。

ブルル・・・ブルル・・・

理沙

「（電話？母から？）もしもし、母さんか？」

「あ、理沙？いきなりだけど、数日間くらい１人でお留守番ってできる？」

理沙

「ハ？」

この人はいきなり何を言ってるのだろっ、と理沙は思った。

理沙

「できると思うが。」

生活能力だけに関して言えば、母よりは優れている・・・

と理沙は少なくともそう思っている、一応は。

「あ、じゃあ平気ね。」

理沙

「なぜそんな質問を？」

「おじいちゃんとおばあちゃんが、商店街の福引きで旅行券5つ当てたから私達5人で一緒に行こうって話になって・・・理沙、旅行とかあまり好きじゃないわよね？」

理沙

「そうだな。っていうかそもそも学校があるので、そんなすぐに旅行とかはムリだと思うぞ。（つまり、家族全員が旅行に行くから、その間留守番はよろしく、という事か。私自身、そういった旅行はあまり好きじゃないから別にかまわん。留守番の方も・・・まあ、多分何とかなるだろう。）ところで、その旅行とやらはいつからだ？」

「今日から。」

理沙

「・・・」

理沙は無言になった。

理沙

「（イヤイヤ、この母親は何を言っているのだろうか。今日から？私、今学校にいるんだが。つまりアレか？家に帰ったら蛻もぬけの殻か？ってか、そう考えてみると電話の向こうから人々のざわめきが聞こえるような気が・・・）つか既に空港にいるのかよ？）」

「じゃあよろしくね。ちゃんとお土産も買ってきて来るから」

理沙

「え？ちよ・・・！」

電話は切れてしまった。

理沙

「お土産とかどうでもいいから、せめて出発を明日に延ばすとか・  
・それにしても・・・母さんは、抜けてる所はあるけれど、ここま  
でいい加減な人ではなかったような・・・何だか、巨大な思惑を感  
じずにはいられんな。家の力ギは・・・あ、良かった。ちゃんと持  
つてた。一応私も普段持ち歩いているとはいえ、今日に限って忘れ  
てもしたらどうするつもりだったんだろう母は？まあ、今さら何を  
言っても仕方ないから、今の状況をしっかり受け止めるとするか。」

理沙はそう思い、校舎へと入って行った。

理沙

「ハアゝ・・・」

理沙はため息をついていた。

成り行きで1人での留守番を引き受けてしまったとはいえ、やはり  
女1人での留守番は心細いものなのだろうか。

泉

「美希ちゃん、理沙ちゃんどうしたんだろっね？」

美希

「さあね。（本当は知っているけど・・・）」

泉と美希がたわいない会話をしていると、ハヤテが理沙に話しかけていた。

ハヤテ

「どうしたんですか、朝風さん？」

理沙

「え！？」

ハヤテ

「何だかとても元気がないように見えますけど・・・」

理沙

「ああ、実は・・・」

内容を言おうとして、理沙は口をつぐんだ。

今ここには自分とハヤテだけでなく、泉と美希もいる。

できればこの2人には聞かれたくない。

そう思った理沙は、ハヤテに耳打ちした。

放課後、屋上に来てくれと。

第05話：朝風理沙編／巫女が執事に恋した日『後編』

放課後、ハヤテと理沙は屋上に來ていた。

ハヤテ

「それで、話というのは何ですか？」

理沙

「ああ、実は・・・」

理沙はハヤテに今朝の事を話した。

祖父と祖母が福引きで旅行券を当て、祖父と祖母と父と母と兄の5人で行く事になった事、その出発日が今日だと言われた事、そして既に空港から旅立ち、理沙は数日間1人で留守番しなければならなくなつた事。

ハヤテ

「そうなんですか。」

理沙

「そ、それでだな・・・私1人だと心細いから、その・・・」

ハヤテ

「ボクに來てくれと言つ事ですか？」

理沙

「な!？」

いきなり核心をつかれ、理沙は驚いた。

理沙

「う、うん・・・まあ、そんなトコだ・・・」

ハヤテ

「わかりました。マリアさんには後で連絡しておきますので、一緒に留守番しますよ。」

理沙

「！」

理沙はハヤテのある言葉に反応した。

理沙

「（ハヤ太君が・・・私と・・・一緒に・・・留守番・・・）」

理沙は一気に顔が赤くなると、気絶してしまった。

バタツ・・・

ハヤテ

「ちよ、ちよつと朝風さん!？」

それからしばらく、理沙の記憶が飛んだ。

理沙

「ん・・・」

次に理沙が目を覚ました時、既に彼女は朝風家の自室のベッドに寝ていた。

理沙

「あれ？確か私、屋上でハヤ太君と話して・・・突然倒れて・・・」

ハヤテ

「あ、やっと起きましたか朝風さん。」

理沙

「あ、ハヤ太君・・・君が私を部屋に？」

ハヤテ

「ええ。朝風さん、その・・・以外と軽かった・・・ので・・・背中に乗せて、朝風神社まで飛んで来ました。」

ハヤテのその言葉に、理沙はその時の自分の姿を想像して、一気に顔が赤くなった。

シュウウウ・・・

ボン！！

理沙

「私、もう・・・お嫁に行けない・・・」

ハヤテ

「ハハ・・・そんな大袈裟な・・・」

理沙

「でも、もし私がお嫁に行けなくなってもハヤ太君が責任取ってくれるんだよね？」

ハヤテ

「え？」

理沙

「とってくれるよね？」

理沙はハヤテを上目づかいで見つめる。

ハヤテ

「ハハ・・・考えておきます。」

理沙

「考えておくとは何だー！！」

理沙は叫んだ。

ハヤテ

「それはそうと、朝風さん。」

理沙

「何だハヤ太君？」

理沙が聞くと、突然ハヤテは理沙のおでこに顔を当てた。



理沙

「わっ！ちよつ、ハヤ太君！？」

理沙は狼狽える。

ハヤテ

「やつぱり、熱がありますねー。」

理沙

「え？」

ハヤテ

「屋上で倒れたのも、それが原因でしょう。こうなった以上、ボクが看病します。」

ハヤテはそう言った。

理沙

「（ハヤ太君が、私を看病・・・？）」

その言葉を聞いた瞬間、また理沙は顔が赤くなった。

理沙

「・・・」

ハヤテ

「では、ボクはおかゆを作って来ますので、朝風さんはベッドに寝ててくださいね。」

ハヤテは理沙に布団をかぶせると、そう言った。

理沙

「あ、はい・・・」

顔が赤くなった理沙を残し、ハヤテはおかゆを作りに行った。

ハヤテ

「お味の方はどうですか？朝風さん。」

理沙

「・・・おいしい。」

理沙は今、ベッドの上にいて、ハヤテにおかゆを食べさせてもらっているという状況だ。

理沙は赤面しっぱなしである。

理沙

「（ダ、ダメだ・・・スゴく顔が赤くなってる・・・私、やっぱりハヤ太君に恋をしているのか・・・）」

理沙はそう思いながら、おかゆを完食した。

ハヤテ

「さて、さっきも熱を測りましたが・・・念のため、もう1度熱を測りましょう。朝風さん、体温計を入れてください。」

理沙

「あ、ああ・・・」

理沙は体温計を脇にはさみ、服を降ろす。

しばらくすると、体温計が鳴った。

ピピピ・・・

理沙は体温計を取り出すと、ハヤテに渡す。

ハヤテ

「37・8度ですか。微妙ですね。夕食の材料もボクが買ってくるので、もう少し寝ててくださいね。」

ハヤテはそう言うのと、理沙の部屋から出て行った。

理沙はしばらくすると、スヤスヤと眠り始めた。

しばらくすると、人気のない朝風神社に1人の男がやって来た。

この時期には珍しい、賽銭泥棒である。

男は賽銭箱に近づくと、慣れた手つきで賽銭箱をこじ開け、中の賽銭を取り出しカバンに詰め始めた。

「へへへ、結構入ってるじゃねえか。お参りに来る客が見当たらね

えから、大して入ってないとも思ったが。」

賽銭をカバンに詰め終わった男は、ふと奥にある朝風家を見た。

「いつもなら賽銭を盗むだけで終わってるが、今日は少し欲張ってみるか・・・」

そう・・・

この男、最近練馬区で多発している賽銭泥棒の犯人なのである。

男は不敵な笑みを浮かべると、朝風家の方へと歩いて行った。

ピンポン、ピンポン・・・

朝風家の呼び鈴が鳴る。

2、3回ほど鳴ったので、寝ていた理沙も目を覚ました。

理沙

「ん・・・ん？ハヤ太君、帰って来たのかな？」

理沙は起き上がると、玄関へと歩いて行った。

そして、カギを開けようとしたその時だった。

ガチャガチャという音が聞こえたのは。

ガチャガチャ！

理沙

「え！？」

理沙は後退<sup>あとずさ</sup>りした。

理沙

「（ち、ちがう！ハヤ太君には私が合いカギを持たせていたから、わざわざ呼び鈴を鳴らす事なんてしないハズだ！！だったら、一体誰が・・・）」

理沙はドアスコップをのぞき込んだ。

そこには、見るからに怪しい男の姿があった。

理沙

「！！（う、強盗！！警察に知らせなければ・・・）」

理沙はそう思って受話器を取ったが、あわてていたので落としてしまった。

カシャ！

理沙

「あ！」

それと同時に、カギが動き始めた。

男がこじ開けようとしているのだ。

理沙

「・・・」

男はカギをこじ開けると、家の中へと入って来た。

そこで、落ちたままの受話器を見る。

「ククク・・・家の住人がいたか・・・」

男は不敵に笑いながら、奥へと進んで行った。

男はしばらく歩くと、人の気配がする場所に来た。

そこは、理沙の部屋だった。

「・・・この家の娘の部屋か。」

男は中へと入る。

「誰もいないのか？」

男はキヨロキヨロと辺りを見回すと、クローゼットから何かが出ている事に気づいた。

「そこか・・・」

男はクローゼットを開けた。

「！何だ、服のソデが出ていただけか。」

男はチツと舌打ちすると、部屋を出て行った。

その部屋のベッドの下に、理沙が隠れていた。

理沙は少し震えている。

理沙

「（どうしょ・・・もし見つかったら・・・）」

理沙は震える手で、携帯電話を開いた。

一方その頃ハヤテは、デパートで材料を買い込んでいた。

ハヤテ

「フウ・・・これだけ買えば、何でも作れるだろう・・・」

最近ハヤテはマリアから給料に近いお金をもらっていたので、買い

物をする事はできた。

そして、買った食材をバッグに詰めている時だった。

ハヤテの携帯が鳴ったのは。

プルル・・・プルル・・・

ハヤテ

「朝風さんからだ。もしもし、朝風さん？どうしたんです？」

電話から聞こえてきたのは、理沙の震えた声だった。

理沙

「ハ、ハヤ太君助けて・・・今、家に強盗が入って来たんだ・・・」

ハヤテ

「ええ！！それで、朝風さんは今どこに？」

理沙

「クローゼットの中に隠れてる・・・」

ハヤテ

「わかりました、すぐに戻りますから待っててください！」

理沙

「うん・・・」

ハヤテは電話を切ると、自転車に乗って走り出した。



その頃、理沙はというと・・・

クローゼットの中で震えていた。

理沙

「（ハヤ太君・・・早く来て・・・怖いよ・・・）」

その時、クローゼットが開けられた。

ガチャ！

理沙

「あ！」

「ククク・・・やっと見つけたぜ。かくれんぼも終わりだ。」

理沙

「・・・」

理沙はガタガタと震えていた。

ハヤテ

「もっと速く！もっと速くだー！」

ハヤテは猛スピードで自転車をこいでいた。

男はリビングルームで札束を数えている。

そのリビングルームの壁に、理沙がもたれさせられていた。

理沙

「んゝ、んゝ！！」

理沙は手足を縄でグルグル巻きにされている。

さらに口にはガムテープを貼られ、『んゝんゝ』としか声が出せない。

理沙

「んゝ、んゝ・・・」

理沙はジタバタともがいている。

男は札束を数え終わると、バッグの中へと入れた。

「さてと、金は手に入ったし、後はトンスラするだけだが・・・このお嬢ちゃんをどうするかな？」

男はそう言つと、理沙の方を見た。

理沙

「!!!」

理沙はビクツとした。

「顔見られちまつたし、生かしくワケにもいかねえよな・・・」

男はクククと笑う。

理沙

「んっ、んんっ・・・」

「仕方ねえ。結構上玉でカワイイお嬢ちゃんだが、始末するしかねえか・・・」

男はナイフを取り出した。

理沙

「!!!」

そして、ゆつくりと理沙に近づいて行く。

理沙は必死にもがいている。

理沙

「んっ、んんっ・・・（そ、そんな！コイツ私を殺す気！？イヤ・・・イヤだよ・・・やっとハヤ太君への気持ちに気づけたのに・・・ハヤ太君を好きになつたってわかったのに・・・こんな形で終わり

たくない！！助けて、ハヤ太君・・・」

理沙は涙が出そうになった。

男がナイフを振り上げる。

次の瞬間、理沙は精一杯叫んだ。

理沙

「んんっ！！！！（ハヤ太君っ！！！！）」

その時だった。

玄関から声が聞こえてきたのは。

「朝風さ〜ん！無事ですか〜！？」

理沙

「（ハヤ太君だ・・・）」

理沙は玄関の方を見た。

「何だ？来客か？まあいい・・・その来客も始末してやる・・・」

男は玄関の方へと歩いて行く。

そして、しばしの沈黙の後・・・

男がリビングへと吹っ飛ばされて来た。

ドザァー！！

理沙

「んゝっ！？」

理沙はビクツとした。

そして・・・

ハヤテ

「朝風さん！！」

ハヤテがリビングへと入って来た。

理沙

「んんんんゝ！！」

ハヤテは男が用意していた縄で男を縛ると、理沙の元へと駆け寄った。

ハヤテ

「朝風さん、大丈夫ですか？」

理沙

「ん、んん・・・」

理沙はうなずいた。

ハヤテは理沙の口に貼られたガムテープをはがした。

ピリリ・・・

理沙

「イタタ・・・ハヤ太君・・・」

ハヤテ

「今、ほどいてあげますから・・・」

そう言つてハヤテは理沙の背後に回ると、理沙を解放した。

その後、ハヤテの通報を受けた警察が到着し、男は連行されて行つた。

理沙は事情聴取を受ける事となり、ハヤテはそれにつき添う事にした。

事情聴取も終わり、ハヤテと理沙は公園で休んでいた。

ハヤテ

「はい、コーヒーです。」

ハヤテは自販機で買って来たコーヒーを差し出す。

理沙

「あ、ありがとう・・・」

理沙は赤面しながら受け取った。

理沙

「ハヤ太君、ありがとう・・・君がいなかったら、きっと私はあの男に殺されていたと思う。」

ハヤテ

「ええ、危機一髪でしたね。」

理沙

「あ、あの・・・ハヤ太君・・・」

ハヤテ

「はい、何ですか？」

ハヤテは笑顔で聞き返した。

理沙

「私ね、最初は君の事、恰好のイジリ相手だとは思ってなかったんだ・・・でも、昨日ハヤ太君に勉強を手伝ってもらったり、一緒に映画を観たりしてて気づいたの・・・私は、君の事が好きになつてたんだって・・・」

ハヤテ

「・・・」

理沙

「でも私はヒナみたいに才色兼備なワケじゃないし、マリアさんみたいに美しいワケでもない・・・私みたいな女がハヤ太君とお似合いじゃない事も、わかってるんだ・・・でも、なぜだろ・・・あの

時強盗に殺されそうになった時、『こんな形で終わリたくない』って思ったの・・・せめて、私の気持ちだけでも伝えたいって・・・そう・・・思ったの・・・だから、今ここで言うよ・・・私、朝風理沙は・・・ハヤ太君・・・イヤ、綾崎ハヤテ君の事が、好きです！！！！」

理沙はうつむいた。

つられる事を覚悟の上で。

しかし、ハヤテの答えはちがった。

ハヤテ

「顔を上げてください、朝風さん。」

理沙は顔を上げた。

ハヤテ

「実はボクも、朝風さんの事最初は女の子として見ていませんでした。でも、2人で過ごしてみても初めてあなたの良さに気づけたんです。そして、気がつけば好きになっていました・・・」

理沙

「え？それって・・・」

ハヤテ

「はい。ボクも朝風さん・・・イヤ、理沙さんの事が好きです。こんなボクで良ければ・・・おつき合いしていただけますか？」

理沙はその言葉に、瞳を潤ませる。



理沙はハヤテに抱きついた。

理沙

「はい、喜んで・・・よろしく願いします、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「こちらこそよろしく願いします、理沙さん・・・」

ハヤテと理沙は抱き合い、キスを交わした。

2人のお留守番騒動から2年後、ハヤテと理沙は結婚する事となった。

式場である教会にはナギやヒナギク達も駆けつけた。

ハヤテはタキシード、理沙はピンクのウェディングドレスだ。

ナギは最初驚いていたが、あの日の事が誤解だとわかってからは2人の交際を喜んでいた。

式は順調に進んでいき、ついに誓いの儀式となった。

ハヤテ

「理沙さん。」

理沙

「ハヤテ君。」

ハヤテと理沙はゆつくりと唇を重ねる。

その瞬間、全員から祝福の言葉が投げかけられた。

末永くお幸せに、と。

これからも様々な事が、2人を待ち受けているだろう。

しかし、この2人ならば乗り越えていける。

お互いを大切に想い合う限り・・・

綾崎ハヤテと朝風理沙・・・

2人の物語は、これからだ・・・

朝風理沙編・完

## 第06話：電愛歌編〜臨時生徒会長と副会長さん

白皇学院時計塔。

ここは、選ばれた生徒が生徒会役員となり、集う場所である。

今ここに、生徒会役員でも何でもない1人の少年がいた。

少年の名は綾崎ハヤテ。

なぜ、こんな事になったかというと・・・

朝の三千院邸にて

綾崎ハヤテ

「え？ヒナギクさん体調不良なんですか？」

ハヤテはヒナギクから電話を受けていた。

桂ヒナギク

「そうなのよ。だからハヤテ君、今日1日だけ生徒会長やってくれない？」

ハヤテ

「ええ！！ボクがですか！？」

ヒナギク

「そうよ。もう泉達には連絡してあるから、よろしくお願いね。」

ハヤテ

「ハ、ハア・・・」

まあこんなワケで、ハヤテは1日生徒会長をやるハメになったというワケである。

ハヤテ

「ハア・・・それにしても、1日だけとはいえヒナギクさんの代わりだなんて荷が重いなあ・・・」

ハヤテはため息をついている。

そんなハヤテに、泉が声をかけた。

瀬川 泉

「大丈夫だよハヤ太君」。私達がいるじゃない！」

ハヤテ

「そうでしたね。でも、瀬川さん達ただと少し不安が・・・」

花菱 美希

「その心配はないわ！」

美希が自信たっぷりに言う。

朝風理沙

「忘れたのかねハヤ太君。生徒会には後2人仲間がいる事を。」

理沙の声と同時に、後2人の仲間が入って来た。

ハヤテ

「えっと、確かあなた方は・・・」

カスミアイカ  
霞愛歌

「私は副会長の霞愛歌です。」

ハルカゼ チハル  
春風千桜

「私は書記の春風千桜です。」

2人は挨拶をした。

ハヤテ

「あ、どうもこんにちは。」

ハヤテも挨拶をした。

泉

「委員長さんレッド」

美希

「副委員長ブルー！」

理沙

「風紀委員ブラック！」

千桜

「えっと、書記グレー！」

愛歌

「副会長ピンク」

泉・美希・理沙・千桜・愛歌

「5人そろって、轟々生徒会戦隊タンケンジャー!!!!」

ドーン!!!!

ハヤテ

「楽しそうだな。」

美希

「なので、私達がいれば心配無用！」

千桜

「綾崎君はかまえていてくれれば良いですから。」

泉

「では、早速。」

理沙

「この服に着替えてくれハヤ太君。」

そう言って理沙が取り出したのは、どこからどう見ても女物と思われる制服だった。

ハヤテ

「着替えてくれって、この服・・・女物ですよね？」

泉

「そだよ？」

ハヤテ

「なぜボクに？」

美希

「なぜって、そりゃ・・・」

理沙

「似合いそうだから。」

ハヤテ

「思いつきですか・・・」

愛歌

「さあ、綾崎君。男らしくこの服を・・・」

ハヤテ

「『男らしく』全然関係ないですよ！ってキャー！！」

いくらハヤテといえども、4人の女の子に囲まれて逃げられるハズもなく（千桜は止めようとしたのだが、愛歌ににらまれずごんできました）・・・

哀れにも女物の制服を着せられてしまったのだった。

美希

「やはり・・・」

理沙

「素材が良いと・・・」

泉

「良く似合うね」

愛歌

「私もそう思います。ですよね千桜さん？」

千桜

「は、はいそうですね・・・」

千桜はハヤテに申し訳ないと思っているらしく、半ば遠慮がちに言う。

ハヤテ

「こんな格好ほめられても全然嬉しくありませんよ。」

愛歌

「ではカツラもかぶりましょうか。さすがにそのままだと何ですし。」

理沙



「では、こんな時のために用意していた水色のロングヘアーのカツラを・・・」

ハヤテ

「何でそんな物用意してるんですかー!!」

その後、全校集会が始まった。

ハヤテは泉達の真ん中にいる状態である。

ハヤテ

「えー、今日はヒナギクさんが体調不良なので、私綾崎ハヤミが臨時生徒会長をする事になりました。よろしくお願いします。」

綾崎ハヤミとは、もちろんハヤテが考えた偽名である。

生徒達から拍手が起こった。

「誰だろあの子？新入生かな？」

「桂さんに負けないぐらいの美人だぞ。」

「あ、綾崎の妹なのか・・・？ちょうど良い！この機会にあの子と仲良くなつて綾崎の好感度をアップだ！」

最後の声の主は誰あろう、変態執事虎鉄だ。

ハヤテはピキツとなった。

ハヤテ

「瀬川さん、麻酔バズーカを出してください。」

泉

「ハイな〜」

泉がバズーカ砲を渡すと、ハヤテはバズーカをぶつ放した。

球は虎鉄めがけて飛んでいき、虎鉄を眠らせた。

ハヤテ

「え〜、早めに言っておきますが、私を怒らせるような事をした人には、兄の怒りの制裁がありますのでお忘れなく〜」

ハヤテは笑顔で言った。

その瞬間、生徒達は思った。

この子はハヤテ以上にヤバいと。

まあ、中身はハヤテなのだが。

そんなこんなで、全校集会は終わった。

ハヤテ

「しかし、半端なく多いですね。」

ハヤテは書類の山を見ながら言った。

愛歌

「そうですね。でも大丈夫ですよ。私達6人で力を合わせれば、こんな書類の山なんて・・・」

千桜

「あの・・・泉さん達帰っちゃいましたけど・・・？」

ハヤテ・愛歌

「ええ!!」

千桜

「またサボりのようですね。」

愛歌

「まあ良いですわ。明日あの子達にお仕置きすれば良いんですから。会長の力も借りれますし」

愛歌は不敵に微笑んだ。

ハヤテ・千桜

「（怖っ!!）」

ハヤテと千桜は思った。

愛歌

「さて、あの3人は放っておいて、私達だけで片づけちゃいましょう。大丈夫です。私と千桜さんと綾崎君の力を合わせれば、ものの1時間程度で終わらせられます!!」

つてなワケで、3人は書類の整理にかかった。

愛歌

「・・・崎君、綾崎君。」

ハヤテ

「ん・・・ん？」

ハヤテは目を覚ました。

愛歌

「あ、やっと起きましたね。」

ハヤテ

「愛歌さん・・・あ、そうだ書類は・・・」

愛歌

「もう終わってますよ。」

ハヤテ

「え？」

ハヤテは目の前を見た。

確かに書類はキレイにまとまっている。

愛歌

「綾崎君はスゴいですね。意識朦朧の状態で書類を整理できるんですから。私と千桜さんも驚いてしまいました。」

ハヤテ

「ハア・・・で、その千桜さんはどこに？」

愛歌

「千桜さんは先に帰りましたよ。何か用事があるそうです。」

ハヤテは愛歌が一瞬含み笑いをしたのをしっかりと見た。

愛歌

「さて、今のところここにいるのは私と綾崎君だけみたいですが・・・どうでしょうかね？」

その言葉にハヤテはハッとした。

今自分がしている格好の事を・・・

イヤな予感がするハヤテ。

愛歌

「せっかく2人きりなのですから、綾崎君には私の着せ替え人形になってもらいましょうかねえ？」

ハヤテ

「き、着せ替え人形って……どういう意味ですか？まさか……」

愛歌

「んー？私が持つてる服を綾崎君に着てもらおうと思ひまして」

ハヤテ

「やっぱり……」

愛歌

「言っておきますけど、今は2人だけしかないから逃げられませんよ。」

ハヤテ

「わかりましたよ……」

ハヤテはしぶしぶ承諾した。

愛歌

「じゃあ、まずはこの服を着てもらいましょうかね？」

愛歌

「わゝ、綾崎君カワイイ」

愛歌は先ほどから、ハヤテの女装写真を撮りまくっていた。

愛歌

「綾崎君スゴく似合っていますよ。本当に男の子なんですか？」

ハヤテ

「それ、もう4～5回は聞きましたよね？」

愛歌

「だって本当にカワイイですから。」

ハヤテ

「そんな事言われても嬉しくないですよ・・・昔ケーキ屋でバイトしてたら男性客に女性店員と間違えられましたし、中学生時代にプールバーでバイトしてた時も女性だと間違えられましたし・・・」

ハヤテはうつむいた。

愛歌

「・・・（あ、あら？もしかして私、地雷踏みました？）すいません、綾崎君があまりにもカワイイのでつい調子に乗ってしまいました・・・」

ハヤテ

「気にしないでいいですよ・・・」

そう言いつつも、ハヤテの周りの空気はよどむ。

愛歌

「（わ、私は気にするんですけどね・・・）」

ハヤテ

「ところで愛歌さん、他の人にもこんな事してるんですか？」

愛歌

「え!？」

いきなりハヤテに聞かれ、愛歌は狼狽えた。

愛歌

「は、はい。私、カワイイ子を見るとついイジメたくなっちゃうんですよ・・・私の悪いクセでして・・・」

ハヤテ

「まあ、ボクは別に気にしませんよ・・・お屋敷でも初回から似たような目に遭ったので・・・」

愛歌

「ハ、ハア・・・」

愛歌は冷や汗をかいた。

ハヤテ

「ところで愛歌さん、写真の事ですが・・・」

愛歌

「だ、大丈夫ですよ!誰にも見せず個人的に楽しむので。」

ハヤテ

「個人的にですか・・・」

ハヤテはホッとした様子だった。



ハヤテ

「では、そろそろ帰りましょうか？」

愛歌

「あ、はい。そうですね。」

ハヤテと愛歌はカバンをつかむと、時計塔を出た。

ハヤテ

「じゃあ、ボクはこっちなので・・・」

愛歌

「はい、また明日ですね。」

ハヤテと愛歌は校門で挨拶を交わすと、別れた。

ハヤテと別れた愛歌は、デパートで買い物をしていた。

愛歌

「フウ・・・今日はこれくらいいいですかね・・・」

愛歌はレジで会計を済ませると、買い物袋を持って外に出た。

しばらく歩いていた愛歌は、後ろからの気配に気がついた。

愛歌が振り返ると、謎の影はピタリと止まった。

愛歌の様子をうかがっているようだ。

愛歌は深呼吸すると、走り出した。

謎の影も少し速度を上げている。

愛歌は買い物袋を持っているので速度が上がらない。

しかし、影の方も何かを持っているのか、走るのが遅い。

愛歌はとっさに方向転換をすると、その方向に駆け出した。

謎の影は一瞬驚いたようだが、まだ愛歌の後を追って来る。

愛歌は走りながら、ため息をついた。

愛歌

「（フウ・・・もしかしてこれはおじい様からもらった『アレ』の  
せいでしょうか？とにかく、もう少し耐えれば逃げ切れるでしょう・  
・・・」

そう思って速度を落とし、歩き始めた愛歌。

その時、愛歌の前方から何かがやって来た。

帽子を目深にかぶり、コートを着込んで顔を隠しているいかにも怪しげな姿。

愛歌は後ろの影に気を取られていたせいか、前の影に気づくのが遅れた。

そして、横にすれ違った時だった。

影が愛歌の手を引っ張り、愛歌の口をハンカチで塞ぐと背中に抱え上げた。

愛歌

「うつ！！」

買い物袋が地面に落ちる。

愛歌

「うつつ、うつつ！！」

愛歌は必死に暴れたが、どうやら相手は男らしく、少し男の速度を落とす程度の効果しかなかった。

男はしばらく走ると、道路に止めてあった車の横で止まり、後部座席に愛歌を押し込もうとする。

愛歌がもうダメだと思ってあきらめかけた、その時だった。

1人の少年の声が聞こえてきたのは。

「疾風の・・・如く!!」

一瞬巻き起こる風。

何が起こったのかもわからずに、男は気絶させられた。

「・・・さん、愛歌さん。」

愛歌

「ん・・・ん？」

体を揺すられ、愛歌はようやく目を覚ました。

愛歌

「あ、綾崎君・・・？」

ハヤテ

「よかった、やっと起きましたね。」

愛歌

「私、一体・・・」

ハヤテ

「愛歌さんは誘拐されそうになってたんですよ。そこにいるあの男にね。」

ハヤテが指差す方を愛歌を見ると、1人の男がパトカーに乗せられ

ようとしているところだった。

愛歌

「じゃあ、帰る時後ろから感じていた視線って・・・」

ハヤテ

「ボクだったんですよ。偶然愛歌さんを見かけましたし、最近は何な輩がいると聞きましたんで。」

愛歌

「だ、だったら、普通に話しかけてくれれば良かったじゃないですか。そうすれば、こんな目に遭う事もなかったのに・・・」

ハヤテ

「すいません。」

愛歌

「まあ、良いですね。助けてもらえましたし。ありがとうございます、綾崎君。」

そう言うと、愛歌はハヤテの頬にキスをした。

その後、愛歌とハヤテは警察で事情聴取を受けてから途中まで一緒に帰ったのだった。

ハヤテは翌日、生徒会3人娘と千桜・ヒナギクの5人と一緒に登校

していた。

と言っても、偶然バスで会っただけなのだが。

ヒナギク

「今日もナギは引きこもりか・・・」

ハヤテ

「ええ、恥ずかしながら・・・」

その時、後ろから来た愛歌がハヤテの肩を叩いた。

愛歌

「おつはよ!」

ポン!

ハヤテ

「ヒヤ! あ、愛歌さんおはようございます・・・」

愛歌

「はい、おはよう。朝からそんな暗い顔してたら・・・幸せつかみ損ねますよ、ハヤテ君」

ハヤテ

「ハ、ハア・・・」

愛歌は笑顔でそう言つと、軽快に校舎の方へと走って行った。

美希

「ヒ、ヒナ、愛歌さん一体どうしたんだ？いつもの彼女とちがうよ  
うな・・・」

ヒナギク

「さ、さあ・・・？」

理沙

「ウム・・・」

泉

「謎だね。」

ハヤテ達は疑問に思いながら、愛歌の後を追った。

ハヤテはその後、生徒会3人娘に女装写真を撮られる事はなくなった。

生徒会副会長・霞愛歌。

彼女がハヤテへの恋心に気づくのは、もう少し後の話だったりする・

霞愛歌編・完

第07話：春風千桜編／執事とシスターとメイドさん『前編』

それは、1人の少女の声から始まった。

ナギ

「ハ？メイドカフェ？」

ナギが話しかけている相手は、愛沢咲夜である。

咲夜

「そや。愛沢グループが新しく経営する事になったメイドカフェがあつてな。」

ナギ

「っていうか、この前も新しくオープンしたって言ってなかったか？」

咲夜

「細かい事は気にすんなや。」

ナギ

「で、それがどうしたんだ？」

咲夜

「ナギ、アンタ前にどんぐりでバイトしたんやろ？ハヤテから聞いてるで。」

ナギ

「ああ、少しだけだったか。」



咲夜

「それでやな、ウチの店でもバイトしてみいひんかって事なんやけど。」

ナギ

「うゝん・・・別に良いんだが、肩がこるしなあ・・・」

そうつぶやいたナギの頭上に、豆電球が出現した。

ピカーン！

ナギ

「そうだ！ハヤテを臨時のメイドとして雇うというのはどうだ？」

咲夜

「お、それええな！ウチもハルさんをそこに行かせるつもりやし。」

ナギ

「ハルさんって誰だ？」

咲夜

「あ、そつか。ナギは知らんのか。最近ウチのメイドになった子や。」

「

ナギ

「へエ。面白そうだな、早速計画を実行に移すぞ咲夜！」

咲夜

「おお！」

ナギと咲夜は、不敵な笑みを浮かべていた。

この事が、後にハヤテと千桜の関係を大きく変える事になるとも知らないで・・・

翌日

メイド喫茶『ミラクル』

メイド喫茶『ミラクル』の裏口に、1人の少女がやって来た。

少女の名前は春風千桜。

白皇学院生徒会書記で、咲夜のメイド『ハル』の正体でもある。

なぜ彼女がここに来ているかというと、この店は愛沢グループが新オープンした店で、千桜はここでバイトしてみるように言われたからなのだ。

面白いヤツに会える、と。

ハルカゼ チハル  
春風千桜

「ここに来れば面白い人に会えると咲夜さんは言っていましたけど・・・誰なんでしょう？面白い人って・・・」

千桜はそう思いながら、裏口から中に入った。

メイド服に着替えてからキッチンに出ると、既に数人のメイドがいた。

その中に、一際キレイなメイドがいる。

どうも、数人のメイドの教育係のようだ。

千桜

「（うわ、キレイなメイドだな。一体どんな人なんだろう？仕事の合間に、話しかけてみようつと。）」

千桜はそう思った。

仕事の合間を見て、千桜はさっきのメイドに話しかけた。

千桜

「あの〜。」

「は、はい！何ですか？」

メイドはあわてて振り返る。

千桜

「え！？」

千桜は一瞬、目が点になった。

なぜならそのメイドは、依然千桜が出会っていた人物だったのだから。

そう、その名前は……

千桜

「あ、あなたは……あや……」

「!?!」

メイドは一瞬の内に千桜の口を塞いだ後、更衣室へと引つ張って行った。

メイドは更衣室のドアを閉めると、口から手を離れた。

千桜

「プハッ！あ、綾崎君……ですよ……!?!」

綾崎ハヤテ

「ええ……そうですね……」

そう、そのメイドの正体は、咲夜の幼なじみ三千院ナギの執事である綾崎ハヤテだったのだ。

千桜

「まさか、振り返るまで綾崎君だと気づけないなんて・・・前に咲夜さんが言っていました、本当にセンスあるんですね・・・女装の・・・あ!!」

ここまで言つて、千桜はハツとした。

ハヤテの周りの空気がよどんでいるのを。

千桜

「・・・（あ、あれ？もしかして私、地雷踏んだ？）」

そう思った千桜は、あわててハヤテに謝った。

千桜

「す、すいません！綾崎君の気持ちも考えずにヒドい事を言つてしまつて!!」

千桜はひたすら頭を下げる。

ハヤテ

「いえいえ、お互い様ですよ・・・春風千桜さん。イヤ、咲夜さんのメイドのハルさん？」

千桜

「え!？」

千桜は冷や汗が流れた。

千桜

「な、なぜ私が咲夜さんのメイドだと・・・」

ハヤテ

「最初はわからなかったのですが、高尾山ハイキングの後お嬢様が言ったんですよ。『一緒に来たツリ目の人、どこかで見た気がする』って。それで考えてみたら、確かにボクもどこかで見たなあって思いました。まあ、花菱さんに教えられて同一人物だとわかったんですね。」

千桜

「な、なぜ美希さんが・・・まさか、誰かに聞いたとか？」

あえて愛歌の名前は出さない千桜。

ハヤテ

「いえ、自分で調べたと言っていました。」

千桜

「そういえば美希さんは政治家の娘でしたね・・・」

千桜はため息をついた。

千桜

「あ、あの、綾崎君・・・」

ハヤテ

「はい、何ですか？」

千桜

「私がメイドをしている事・・・他の皆さんには内緒にしておいてもらえますか？」

ハヤテ

「え、なぜです？」

千桜

「私、普段はクールで済ましているキャラなので・・・メイドをやっていると知られたら、何を言われるかわからないんですよ・・・」

ハヤテ

「わかりました。他の人には内緒にしておきます。」

千桜

「あ、ありがとうございます！」

千桜は少し目が潤んだ。

その後営業は順調に進み、お昼休みとなった。

ほとんどのバイト員はお昼を食べに行ってしまったが、千桜はまだ残っていた。

なぜかというと、ハヤテの事を考えていたからである。

千桜

「(フム・・・綾崎君って、体つきは華奢で女の子っぽいですけど、とても優しい方ですね・・・それでいて、約束もしてもらえませんでした・・・あれ？いつの間にか私、綾崎君の事ばかり考えていますね。なぜなのでしょう・・・?)」

千桜は少し考える。

千桜

「（今まで会ってきた男性と比べると、綾崎君はスタイルも良いですし・・・何より頼れるお兄さんのような感じがしますしね・・・もしかして、私・・・綾崎君に恋でもしてしまったのでしょうか？）」

千桜はそう思いながら、厨房へと向かった。

千桜

「あら、綾崎君・・・」

ハヤテは厨房で料理を作っていた。

千桜

「綾崎君、何をしているんです？」

ハヤテ

「今さっきお客さんが来たので、注文された料理を作ってるんですよ。」

千桜

「困りましたね、今私達しかいないのに・・・」

ハヤテ

「大丈夫ですよ。依然ボクだけで料理を数点やった事ありますので。千桜さんはそちらの料理をやってください。」



千桜

「あ、はい。」

千桜は作業に取りかかった。

わからないところはハヤテに少し教えてもらっている。

千桜

「いろいろ知ってますね、綾崎君。」

ハヤテ

「ええ、昔ケーキ屋さんや料亭でバイトしてた事もありますので。」

千桜

「ハァ、スゴいですね。」

ハヤテ

「ありがとうございます。」

そんなたわいない会話が流れる。

その時だった。

突然千桜の足下を、何かが駆け抜けたのだ。

千桜

「キャッ！！ネ、ネズミ！？」

ネズミを避けた千桜だったが、反動で少しぐらついた。

千桜

「あ・・・」

ハヤテ

「千桜さん!!」

ハヤテは千桜を助けようとしたのだが、あわてていたためぶつかってしまった。

そして・・・

ドシャ!!

千桜

「あ、綾崎君・・・」

ハヤテ

「ち、千桜さん・・・」

今の状況、わかりやすく言うとハヤテが千桜を押し倒してしまっている状態である。

お互いに気まずい空気が流れた。

その時・・・

パシャ!

ハヤテ・千桜

「!!」

「あらあら、これは面白い写真が撮れましたね。」

千桜

「そ、その声は・・・」

ハヤテ

「あ、愛歌さん!？」

そう、先ほど店に来た客とは、霞愛歌の事だったのだ。

カスミアイカ  
霞愛歌

「偶然にも2人が同じ場所でバイトしているので、少しイタズラしてみようと思ったのですが・・・やりすぎましたかね。」

ハヤテ・千桜

「やりすぎです!!」

2人の声がハモった。

愛歌

「すいませんね。この写真は私のジャプニカ弱点帳に貼るだけで、皆さんには口外しませんので。」

愛歌は笑顔で言った。

どこかニヤついているのは気のせいだろうか。

愛歌

「どうやら2人しかいないようですし・・・お詫びもかねて、私も

お手伝いしますよ。」

愛歌が助っ人に加わった。

ハヤテはその後、何事もなかったかのように黙々と料理を作っている。

千桜

「綾崎君、スゴいですね・・・気にも止めずに作業を進めているなんて・・・」

愛歌

「綾崎君の方は調子良いようですが、千桜さんの方はあまり進んでいませんね。」

確かに愛歌の言う通り、千桜の方の作業はあまり進んでいなかった。

千桜

「あ、そ、そうですか？」

愛歌

「もしかして千桜さん、綾崎君にときめいてしまったのではありませんか？」

愛歌は千桜に耳打ちした。

千桜

「なっ!？」

千桜は狼狽えた。

その様子を見て、愛歌は笑みを浮かべる。

千桜

「さ、さあ？どうなんでしょうね・・・」

千桜はとぼけながら、ハヤテの隣で作業を進めた。

愛歌はそれを見て、微笑みながら席へと戻った。

その後、ハヤテは厨房で料理を作り続け、千桜や他のメイドは客の相手をしたりしていた。

何事もなく、喫茶は閉店の時間を迎える。

ハヤテは早々に帰ってしまったので、千桜は1人で帰路に着いた。

春風家

千桜は自室で、ハヤテの事について考えていた。

千桜

「あの時は何となくごまかしましたけど、確かに愛歌さんの言う通り、綾崎君の事が気になってきてますね・・・具体的には、綾崎君に約束をしてもらった時からでしょうか・・・なぜなのでしょう？やはり恋なのでしょうか・・・」

千桜はいろいろと考えた。

しかし、いくら考えてもわからない。

仕方がないので、愛歌に電話をかける事にした。

愛歌

「もしもし。あ、千桜さん？」

千桜

「愛歌さん、こんばんは。実は、相談したい事がありまして・・・」

愛歌

「綾崎君の事ですか？」

千桜

「うっ!!」

愛歌

「凶星だったようですね。」

千桜

「え、ええ・・・なぜなのでしょう？今日あんな事があってから、

ずっと綾崎君の事が頭から離れないんです……」

愛歌

「千桜さん、それは……あなたが綾崎君に好意を持っているからですよ。」

千桜

「やはりそうなのですか……」

愛歌

「え？気づいてるんですか？」

千桜

「ええ……薄々自覚してはいるんです、意識しているなって……でも、おそらく綾崎君は女子に人気があると思うんですよ。」

愛歌

「確かに。編入して来た時、ほぼ全員から好感を持たれていたと聞いてますし……会長も気があるようですからね。」

千桜

「か、会長も？私、どうすればいいんでしょう……他の方ならまだしも、会長が相手では……」

愛歌

「千桜さん、私が言うのも何ですが……恋は障害が多いほど燃えるものです。千桜さんは千桜さんなりにがんばればいいのですよ。会長にも負けないように。」

千桜

「わ、わかりました・・・私、がんばってみます!」

愛歌

「がんばりなさい。」

千桜

「ありがとうございます、愛歌さん!」

千桜は電話を切った。

愛歌

「自分なりにがんばれ、か・・・私も人の事言えませんよね。」

そう言つて、愛歌はジャプニカ弱点帳を開く。

そのあるページには、橘ワタルの写真が挟まれていた。

愛歌

「私も、がんばってみましょうかね・・・」

愛歌はそう言いながら、眠りに着いた。

翌日、白皇学院

ハヤテは今日も白皇に登校していた。



ナギは相変わらずの引きこもりだが。

ハヤテ

「ハア、お嬢様いつになったら学校に通ってくれるのかなあ・・・」

そんな事を言っていると、後ろから声をかけられた。

「綾崎君！」

ハヤテ

「あ、千桜さん。おはようございます。」

ハヤテは振り返り、挨拶をする。

千桜

「おはよう、綾崎君。あ、あの・・・」

ハヤテ

「何です？」

千桜

「きよ、今日のお昼、良かったら私と一緒に食べませんか？」

ハヤテ

「はい、良いですよ。」

ハヤテは即答した。

千桜

「ありがとうございます！」

千桜は嬉しそうだ。

ハヤテ

「そういえば、生徒会の皆さんはいつもみんなで食べてるんですか？」

千桜

「はい。にぎやかすぎて困るんですけどね。特に桂先生が。」

ハヤテ

「ハハハ。」

そんな会話をしていると、ヒナギクがやって来た。

ヒナギク

「ハヤテ君、ハル子、おはよう！」

ハヤテ・千桜

「おはようございます。」

ヒナギク

「2人共、至急講堂に集まって。全校集会があるらしいの。」

ハヤテ・千桜

「あ、はい。」

ハヤテと千桜は、ヒナギクについて行った。

ハヤテ達が講堂に着くと、もう生徒達が集まっていた。

泉

「あ、ハヤ太君にちーちゃん！」

美希

「遅いわよ。」

理沙

「全くだ。」

愛歌

「まあまあ。」

「皆の者、静まれ！」

ヒナギク

「理事長の声だわ。」

白皇の理事長、葛葉キリカが現れた。

葛葉キリカ

「えー、今日みんなに集まってもらったのは他でもない。実は、今日から白皇に新しい編入生が入る事になった。」

泉

「編入生なんて、ハヤ太君以来だね。」

ヒナギク

「『ハヤテ』でしょ？」

キリカ

「学年は3年生だ。では、その編入生を紹介する。詩音！」

詩音

「はい！」

詩音がその編入生を連れて来た。

ハヤテ・ヒナギク

「え！？」

ハヤテとヒナギクが驚くのも無理はない。

なぜなら、その編入生は・・・

「初めまして！シチリアから転校して来た、ソニア・シャフルナーズです。」

そう、かつて執事実習と称してハヤテとナギをアレキサンマルコ教会で倒そうとした、あのシスターであった。

ソニア・シャフルナーズ

「よろしく」

ハヤテ

「な、なぜ・・・！？」

ヒナギク

「あの人……!?」

白皇に編入して来たソニア。

波乱は必至だ!?

第08話：春風千桜編／執事とシスターとメイドさん『中編』

ソニア・シャフルナース

「シチリアから転校してきた、ソニア・シャフルナースです。よろしくお願いします」

ハヤテ

「シ、シスター・・・」

ヒナギク

「な、なぜ・・・あの人が白皇に・・・」

白皇学院に編入してきたソニア・シャフルナース。

波乱は必至だ！！

ハヤテと千桜が食堂で昼食を取っていると、そこにソニアがやって来た。

ソニア

「ハヤテ君、空いてる席良いですか？」

ハヤテ

「あ、はい。良いですよ。」

ソニア

「ありがとうございます。」

ソニアはハヤテの隣の席（右側）に座った。

千桜はハヤテの左側の席である。

千桜

「（ハ、ハヤテ君ですってえ〜？私だってまだ名字でしか呼べてないのに〜！！この人、何者ですか！？）綾崎君、彼女とはどういう関係で？」

千桜は少しムスツとしながら、ハヤテに話しかけた。

ハヤテ

「えっと、前に教会でいろいろありまして・・・その時に知り合っただけですよ。」

千桜

「へ〜、そうなんですか・・・」

千桜はまだ不機嫌のようだ。

ソニア

「ところで、ハヤテ君・・・そろそろ『シスター』と呼ぶのは止めていただけませんか？私には『ソニア』という名前があるもので・・・」

千桜

「あ、あの、綾崎君！私も『ハヤテ君』って呼んでも良いですか？」

ハヤテ

「え、えっと・・・」

ハヤテは2人から同時に聞かれたが、すぐに答えた。

ハヤテ

「はい、どちらも良いですよ。千桜さん、ソニアさん」

ハヤテは天使のような笑顔を見せる。

その笑顔に、千桜とソニアは見惚れてしまった。

千桜

「（ああ、やっと名前と呼べた・・・で、でも何なんでしょう？この胸の高鳴りは・・・）」

ソニア

「（ハヤテ君の笑顔、まるで天使のようです・・・私とした事が一瞬彼にときめいてしまいました・・・私にはワタル君という想い人がいるのに・・・）」

千桜とソニアは顔が真っ赤である。

ハヤテ

「ところで、ソニアさんはなぜ白皇に？」

ハヤテはソニアに質問した。

ソニア



「え？そ、それはですね・・・ワタル君の事が理由なんです。」

ソニアはハヤテに説明した。

教会での1件の時、ワタルの笑顔に見惚れてしまった事、そしてこの前ビデオを借りに来た時彼への気持ちに気づいた事を。

ハヤテ

「それで、ワタル君の好みを知るために白皇に？」

ソニア

「あ、はい・・・ワタル君はハヤテ君に懐いているそうなので、あなたなら好みを聞いているかと思ひまして・・・」

ソニアはもじもじしている。

千桜

「（なーんだ、ソニアさんはワタル君目当てでしたか・・・ハヤテ君目当てでなくてホツとしました・・・って、あれ？何で私、ホツとしてるんでしょう・・・？）」

千桜は考え込んだ。

ハヤテ

「そうですねえ、ボクはワタル君の好みを彼自身から聞いた事は無いのですが・・・お嬢様によると幼い頃からサキさんをメイドとしてはべらせているそうですし、案外ああいうタイプの人が好みなのかもしれませんよ？」

ソニア

「・・・」

ソニアの脳裏に、サキの姿が浮かぶ。

次の瞬間、ソニアの目は潤んでいた。

ソニア

「グスン・・・」

ハヤテ

「ちょ、ちょっと！何を泣いてるんですか！！」

ソニア

「だ、だって・・・」

ハヤテ

「さっきの話はたとえ話じゃないですか！」

ソニア

「でも、もし私がワタル君の好みでなかったら・・・」

2人の間に、しばらく沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは、千桜だった。

千桜

「だったら・・・ソニアさんもやってみれば良いんじゃないですか？」

ハヤテ

「え？」

ソニア

「やってみるって・・・何をです？」

千桜

「だから・・・メイドのバイトですよ。」

ハヤテ・ソニア

「・・・ハ？」

ハヤテとソニアは目が点になった。

ソニア

「えっと、春風千桜さんでしたっけ・・・なぜ私がメイドのバイトを？」

千桜

「それは、万が一ワタル君の好みがメイドさんだった場合、サキさんの勝負になればソニアさんがあまりにも不利になるからです。」

ハヤテ

「まあ確かに・・・サキさんはメイドですけど・・・ソニアさん、無理はしない方が・・・」

ソニア

「良いでしょう。私も神に仕える者の端くれ・・・これも神のお導きです。ならば・・・やりましょう！メイドのバイトを！！」

こうして、ソニアは喫茶『ミラクル』でのバイト仲間に加わる事と

なった。

翌日

喫茶『ミラクル』では、ハヤテ達が集まっていた。

新しくメイドのバイトをする事になった、ソニアも一緒である。

ハヤテ

「では、皆さんは一昨日教えた通りに仕事をこなしてください。よろしいですか？」

「はい!!」

メイド達は返事をし、仕事に取りかかった。

ハヤテ

「では、ソニアさんは初心者なので・・・私がいろいろ教えます。」

ソニア

「よ、よろしく願います・・・」

その言葉に、千桜は反応した。

千桜

「（ハヤテ君がソニアさんに個人指導・・・？何でしょう・急にモ

ヤモヤしてきました・・・」

千桜はそう思いながら、作業に取りかかった。

ハヤテ

「ここはこうやって、こうやるんですよ。」

ハヤテは先ほどから、ソニアにいろいろな事を教えている。

ソニア

「いろいろな事を知っているんですね、ハヤテ君。」

ハヤテ

「ええ、昔ケーキ屋さんでバイトしていたもので。」

ソニア

「そうなんですか・・・ありがとうございます、教えていただいて。」

「

ハヤテ

「いえいえ。」

ハヤテはニコリとした。

その笑顔にソニアはドキツとした。

ソニア

「あ・・・キャ！」

ソニアは豪快にコケてしまった。

ハヤテが助け起こす。

ハヤテ

「大丈夫ですか、ソニアさん？」

ソニア

「あ、ありがとうございます・・・」

ソニアは赤面している。

その光景を、千桜はジューツと見つめていた。

千桜

「（何ですか、ソニアさんのあの行動！明らかにハヤテ君にデレデレしてるじゃないですか！ワタル君が好きなんじゃないんですか！？）」

千桜はムカムカしている。

千桜

「（ハヤテ君に個人的指導を受けるなんて、うらやましすぎです！私だってハヤテ君に指導してもらいたいのに！！って、あれ？今私、モノスゴく大胆な事考えませんでしたか！？）」

考えてました。

千桜

「（な、何考えてるんですか私は！！ハヤテ君に指導を受けたいだなんて・・・な、なぜ、こんな事考えたんでしょうか・・・）」

そんな事を考えていた千桜だが、その時彼女の足下を何かが通り抜けた。

カササ・・・

千桜

「キャツ！！ゴ、ゴキ・・・」

千桜は驚いた拍子にぐらついた。

千桜

「あ・・・」

コケた、と千桜は思った。

しかし、床の感触がない。

それはなぜか？

そう、ハヤテが間一髪で千桜を助けたからである。

ハヤテ

「大丈夫ですか？千桜さん。」

千桜

「え、ええ・・・ありがとうございます・・・ハッ！！」

千桜はふと自分の状態を見る。

千桜はハヤテにお姫様だっこをされている状態になっていた。

千桜

「あ、あわわわわ！！降ろしてください、ハヤテ君！！」

ハヤテ

「あ、はい、すみません・・・」

ハヤテは即、千桜を降ろした。

その光景を見て、ソニアは赤面している。

千桜

「（ハヤテ君に助けられたのは嬉しいですけど・・・お姫様だっこされてしまうなんて・・・恥ずかしい・・・でも、満更でもない気分ですね・・・）」

千桜がそんな事を思っていると、誰かが手招きしているのが見えた。

千桜はその方へと歩いて行った。

千桜

「あ、愛歌さん・・・今日も来たんですか？」

愛歌

「ええ。今日は美希さんも来ましたよ。」

千桜



「ええ!!」

千桜は驚く。

愛歌の後ろから美希が出て来た。

美希

「こんにちは、『ハルさん』。さっきはいいものを見させてもらっ  
たわ。」

千桜

「え!?!ま、まさか、見てたんですか・・・!?!」

美希

「ええ、もちろん。」

愛歌

「写真も撮らせていただきましたよ」

千桜は絶句する。

千桜

「あの、愛歌さん、美希さん・・・会長にはそれを絶対に見せない  
てください。もしバレたら、私は・・・」

愛歌

「わかってますよ。」

美希

「当たり前だ。さて、我々は席に戻るとするか。」

愛歌と美希は、席へと戻って行った。

千桜

「（フウ・・・それにしても、どうして私はあんな事言っただんじよう・・・会長に知られたくないからでしょうか？それとも・・・ハヤテ君に、恋をしているからでしょうか・・・？）」

千桜がそんな事を考えていると、ソニアがやって来た。

ソニア

「千桜さん。」

千桜

「あら、ソニアさん。」

ソニア

「さっきの光景はスゴかったですね。」

千桜

「そ、そうですね・・・あの、ソニアさん・・・」

ソニア

「はい？」

千桜

「ソニアさんは、ハヤテ君の事どう思ってるんですか？」

ソニア

「そうですね・・・最初は意識してなかったのですが、さっきの事

もあってか少しだけ気になる存在になりましたかね・・・」

千桜

「そうですか・・・」

ソニア

「あ、でも、心配しなくていいですよ。私はワタル君一筋ですし・・・千桜さんの想いを邪魔したくはありませんから。」

千桜

「なっ!？」

千桜は狼狽えた。

ソニア

「ウフフ、カワイイですね〜千桜さん」

千桜

「もう、からかわないでくださいよソニアさん・・・」

そんな会話をしていると、突然悲鳴が聞こえた。

「キャアアアアアア!!!」

ソニア

「な、何ですか今の悲鳴は!？」

千桜

「向こうの方から聞こえましたよ!!!」

ハヤテ

「行ってみましょう!!」

ハヤテ達が厨房から出て来ると、周りに4・5人の怪しい男達が拳銃を所持して立っていた。

他のメイド達や客達は縄で縛られ、1ヶ所にまとめられて座らされている。

ハヤテ

「まさか、強盗が入って来るとは・・・」

「おい、アンタこの店の責任者か？」

リーダーらしき男がハヤテに声をかけた。

ハヤテ

「ええ、一応そうですよ。」

ハヤテは返事をした。

「なら話は簡単だ。オレ達は強盗団。この店の売り上げ金をいただきに来た。おとなしくしてもらおうか？」

ハヤテ

「断ります。私はこの店を咲夜さんから任されているんです・・・あなた方の言いなりになるワケにはいきません! ソニアさん、援護を頼みます!」

ソニア

「わかりました！」

ソニアはどこからかトンファーを取り出した。

「ナメやがって・・・やれえ！！」

男2人がハヤテとソニアに向かって来た。

ハヤテ

「ソニアさん、そちらは任せますよ！」

ソニア

「はい！」

ハヤテ

「ハッ！！」

ハヤテは男を攻撃した。

ソニア

「やあっ！！」

ソニアもトンファーで応戦する。

「がっ！！」

「クソ、コイツら強いぞ！！」

ハヤテ

「その通りです。皆さんを守るためなら、私達の力は何倍にもなり

ます。」

ソニア

「あきらめた方が良いのでは？」

「クツ・・・」

男達は後退りする。

「ククク・・・それはどうかな？」

ハヤテ・ソニア

「え！？」

ハヤテとソニアが振り返ると、リーダー格の男が千桜を羽交い締め  
にしていた。

ハヤテ

「ち、千桜さん！！」

ソニア

「し、しまった・・・！！」

「なかなか強いお嬢さん達だが、それもここまでだ。このお嬢さん  
の顔にキズをつけたくなけりゃ、おとなしくしな。」

拳銃を突きつけられる千桜。

千桜

「うつ・・・」

ハヤテ

「ク、クソ・・・」

ソニア

「しかたありません・・・」

ハヤテとソニアは、おとなしくなった。

その後、ハヤテと千桜とソニアは手足を縄で縛られ、床に座らされた。

男達は悠々と売り上げ金をバッグに詰めている。

「ククク・・・たんまりあるな・・・」

男はバッグに金を詰め終わると、ハヤテ達の所へとやって来た。

「さて、金はいただいたが、お嬢さん達にはもう少しオレ達につき合ってもらおうでしょう。オマエ達！このお嬢さん達を運び出せ。」

リーダーが命令すると、1人がハヤテと千桜を、もう1人がソニアを背中に抱え上げた。

そして、もがく3人を裏口から外へと連れ出す。

しばらく歩いた男達は止めてあった車の前まで来ると、車の後部座席を開けてその中にハヤテ達3人を放り込んだ。

ドサッ！

ハヤテ・千桜・ソニア

「キャッ！！」

男達は車に乗り込むと、何事もなかったかのように車を発車させる。

ハヤテ達3人を乗せた車は、そのまま走り出したのだった。

一方、客の1人として来ていた愛歌は、縄を解こうと必死になっていた。

愛歌

「（一刻も早くこの縄を解いて、綾崎君達の危機を会長に知らせなければ・・・）」

愛歌は必死に縄目を緩めようとするが、なかなか縄目は緩まない。

愛歌

「クッ・・・この・・・」

愛歌は力を込める。

その時、背中合わせになっていた美希が立ち上がった。



美希の縄はあっという間にほどけていく。

バサッ・・・

美希

「フウ・・・何とか解けたわ。」

愛歌

「美希さん、どうやって縄を・・・？」

美希

「私、万が一の時のために小型のナイフを持ってるのよ。奪われてなくて良かったわ。」

そう言うと、美希は愛歌の縄もほどきにかかる。

ほどなく、愛歌の縄もほどけた。

バサッ・・・

愛歌

「助かりました、美希さん・・・」

美希

「どういたしまして。さあ、残りの人達も解放しましょう。」

愛歌

「ええ、そうですね。」

美希と愛歌は他の人達も解放すると、メイド達に警察に通報するよう頼んだ。

愛歌

「では、会長に連絡を取りましょう。綾崎君達を助け出すためにも！！」

美希

「ええ、そうね。」

愛歌はヒナギクの携帯に電話をかけ始めた。

果たして、愛歌と美希はハヤテ達3人を救い出す事ができるのだろうか？

そして、ハヤテと千桜の気持ちの行方は・・・！？

第09話：春風千桜編／執事とシスターとメイドさん『後編』

ハヤテ達が連れ去られしばらくたった頃・・・

三千院家では、ナギ達の間には緊張が流れていた。

ナギ

「な、何！？ハヤテがさらわれただと！？」

咲夜

「ハルさんもやて！？」

ヒナギク

「さらにシスターもだなんて・・・」

愛歌

「ええ・・・すみません、あの時私達が捕まったりしなければ・・・」

「

マリア

「愛歌さん達のせいじゃありませんわ。」

伊澄

「悪いのは、強盗の皆さんなのですから・・・」

愛歌

「ありがとうございます。」

美希

「そう言ってもらえて、少しは気が楽になったわ。」

ナギ

「さあ、ではそろそろ行こうか？」

咲夜

「ハヤテ達を助けにな。」

マリア

「そうですね。」

ヒナギク

「え、マリアさんも行くんですか？」

マリア

「もちろんです。元々ハヤテ君にあそこでバイトするようにしたのは私達ですから。」

伊澄

「それでは、参りましょう・・・ハヤテ様達の救助に・・・」

ナギ達はうなずき合つと、三千院家を出発した。

その頃ハヤテ達かというと、廃墟となったホテルの一室に監禁されていた。

3人は別々に縛られ、床に座らされている。

千桜

「ハヤテ君、私達これからどうなるんでしょうか・・・」

千桜が不安そうにハヤテに話しかけた。

ハヤテ

「さあ、まだわかりませんが・・・」もうしばらくつき合ってもら  
う』と言っていましたから、おそらく定番のあれなんでしょうね。」

ソニア

「あれって・・・よく刑事ドラマで出てくる『身代金目的の誘拐』  
ですか・・・?」

ソニアも不安そうだ。

ハヤテ

「おおむねそんなところでしょう。」

千桜・ソニア

「そ、そうですね・・・」

千桜とソニアはため息をつく。

その時、扉が開いた。

ハヤテ・千桜・ソニア

「!」

ハヤテ達はドアの方を見る。

強盗団達が入って来た。

「よお、お嬢さん方。ちゃんとおとなしくしてたか？」

リーダーが話しかける。

ハヤテ達は黙ってうなずいた。

「さてと、そろそろ家の電話番号を教えてもらおうか。」

男の1人が3人に話しかける。

だが千桜とソニアは拒否した。

千桜

「イヤです。」

ソニア

「どうして見ず知らずの人に教えなくちゃいけないんですか。」

千桜とソニアは男達をにらみつける。

「サッサと言えよ。でないと痛い目に遭わせるぞ。」

男はナイフを取り出した。

千桜

「ヒッ!!」

千桜は怯えてしまったが、ソニアは目つきを変えない。

ソニア

「そんなもので脅したところで、言っ事聞くと思ってるんですか？」

「生意気なお嬢さんだ、じゃあ望み通り痛い目に・・・」

男がナイフを振り上げようとした時、ハヤテが声を上げた。

ハヤテ

「待ってください、私が教えます。」

ハヤテの言葉に、千桜とソニアは驚いた。

千桜

「ちよっ、ちよっとハヤ・・・ハーマイオニーさん!？」

ソニア

「ダメですよ、教えては!!」

2人は叫ぶ。

「うるさいヤツらだな。」

男2人は千桜とソニアに近づくと、ガムテープを取り出し2人の口に貼った。

千桜・ソニア

「んっ、んっ!!」

「じゃあ今から教えてもらおうか。おい、誰かこのお嬢さんを別室へ連れて行け。」

別の男がハヤテの足の縄を解き、ハヤテを立ち上がらせる。

ハヤテは男に連れられ、別室へと移動した。

「後の3人は、そのお嬢さん達をしっかりと見張ってるよ。」

リーダーはそう言つと、部屋を後にした。

その頃ナギ達は、伊澄の家に来ていた。

鷺之宮邸

ナギ

「なあ伊澄、何ですぐにハヤテ達を探しに行かないんだ？」

咲夜

「そや、早う探さなアカンやろ？」

ナギと咲夜が言った。

美希

「そうもいかないのよ、ナギちゃん。私が調べたところ、どうやら



今回ハヤ太君達がバイトしてた喫茶店に押し入った強盗団は最近、  
ちまた  
巷で話題になっていいる凶悪な犯罪兄弟だったのよ。」

美希が静かに言った。

ナギ

「な、何！？犯罪兄弟だって！？」

ナギは驚いた。

愛歌

「聞いた事があります。昔親を亡くした男達が出会い、まるで実の兄弟のように仲良くなったという5人組を。それが彼らなのですね？」

伊澄

「ええ、でもそれだけじゃないの。彼らはとても残忍で、女子供にも容赦しない集団なのよ。」

美希

「じゃあ、伊澄ちゃんがこの家に寄った理由は……」

伊澄

「ええ。彼らの相手に素手では危険ですから、我が鷲之宮家に伝わるもう2本の刀を取りに来たのです。その内の1本の刀の名は、かの有名な刀鍛冶村正が鍛え上げた最強の1本……木刀・村正です。」

ナギ

「それは突っ込んだら負けなのか？」

ヒナギク

「これ言うの2度目だけど、名匠も悩んでたのかしらね・・・」

伊澄

「正宗は生徒会長に預けてありますが・・・村正は誰に貸しましたか・・・」

咲夜

「そやったら、ウチに貸して！」

伊澄

「わかったわ。咲夜に貸します。そして私が使う刀は・・・魔剣・物干竿『改』！！当然これも木刀です！！」

マリア

「伊澄さんは物干竿ですか・・・なら私は・・・」

美希

「マリアさんは斬鉄剣とか言うんじゃないでしょうね・・・」

愛歌

「それはさすがにマズいのでは・・・」

マリア

「問題ありません。箒に仕込んでる刀ですし、これは『私用』ですから。」

マリアは笑顔で言った。

伊澄

「それでは、そろそろ向かいましょう。ハヤテ様達を助けるために・  
・・」

ナギ達は鷲之宮邸を出ると、聞き込みを開始した。

ナギ達が聞き込みを開始してから1時間後・・・

ようやく、ハヤテ達がいる場所を突き止めた。

ちなみに捜索に加わったのは、何と幽霊神父だった。

実はリイン、出かけている途中に偶然目撃していたのだという。

リインの協力もあり、ナギ達は犯人達の隠れ家に取り込もうとしていた。

ナギ達が向かっていた頃、ハヤテ達は1室にいた。

「さてと、もうすぐ身代金も手に入るワケだが・・・アンタ達はどうしようかね？」

男の1人が、ハヤテ達を見た。

「金さえ手に入れば、アンタ達は用済みだ。」

「かわいそうだが、始末するとするかな。」

男達は不敵に笑う。

その時、ハヤテ達が声を出した。

ハヤテ

「あの、皆さん・・・何をせずに私達を解放していただけませんか？」

千桜

「こんな事をしても、いずれ警察がやって来ればあなた達捕まりますよ。」

ソニア

「今ならまだ間に合います。お願いだから私達を解放してください！」

千桜とソニアも口々に叫ぶ。

しかし、男達は聞き入れなかった。

「うるせえお嬢さん達だな。」

「早いトコ始末しようぜ。」

男達は、ハヤテ達に拳銃を向けた。

3人は、目をつぶった。

その時だった。

声が聞こえてきたのは。

「八葉六式・撃破滅却。」

ドゴオオオオオ！！

壁が吹っ飛んだ。

「な、何だあ！？」

男達が驚いていると、伊澄が中に入って来た。

「和服のガキ？」

伊澄

「皆さん、いました！ハヤテ様達です！」

伊澄の声と同時に、マリア達も中に入って来た。

ナギ

「ハヤテ、無事か！」

咲夜

「ハルさん！」

ヒナギク

「シスター！」

「コイツら、サツの回し者か！？」

「かまうこたねえ！やっちまえ！！」

「オオ！！」

リーダーの命令で、男達がマリア達に襲いかかる。

しかし、相手が悪かった。

マリアと咲夜とヒナギクは、たった数秒で男達を峰打ちにした。

「な、何！？」

リーダーが驚いていると、物干竿を持った伊澄がスーッとやって来た。

伊澄

「おとなしく投降してください。」

伊澄は静かに言った。

「ナ、ナメるなあ！！」

リーダー格の男は伊澄に襲いかかったが、拳銃を撃つよりも速く伊澄の剣が拳銃を斬り裂いた。

ザン！！

「！！！」

男は床に尻餅をついた。

伊澄は笑顔で言った。

伊澄

「おとなしく投降してください。」

「は、はい・・・」

男はおとなしくなった。

その後、ナギ達と呼んだ警察が駆けつけ、男達は連行された。

ハヤテ達は簡単な事情聴取を済ませた後、三千院家へと帰って行った。

その夜、ハヤテは千桜の部屋（ナギが貸した部屋）に来ていた。

千桜から、話があるから部屋に来てくださいと言われたからである。

ハヤテ

「で、話というのは何ですか？」

千桜

「あ、はい。ハヤテ君にどうしても言いたい事があつたんです。」

ハヤテ

「何ですか？千桜さん。」

千桜

「私、最初に出会った時はハヤテ君の事をあまり意識していませんでした。ですが、今回一緒にバイトをしたりしてハヤテ君と過ごす内に気がついたんです。私は、ハヤテ君の事が好きになっていったて・・・」

ハヤテ

「・・・」

千桜

「でも、ハヤテ君の周りには私よりも魅力的な人がいます。もしかしたら、私は選ばれないかもしれない・・・それでもいいんです。私がハヤテ君に好意を持っていた事があなたにわかってもらえれば・・・なので、今あなたに告白します。私、春風千桜は・・・綾崎ハヤテ君、あなたの事が好きです。」

千桜は静かに言い、目を閉じた。

ハヤテ

「目を開けてください、千桜さん。」

ハヤテの言葉に、千桜は目を開ける。



ハヤテ

「実はボクも、最初は千桜さんの事意識していませんでした。ですが、今回あなたと一緒に過ごしている内にボクの気持ちが変わってきた事に気づいたんです。いつの間にか、あなたの事が好きになっていたんだと・・・ボクもあなたが好きですよ、千桜さん。」

その言葉に、千桜は目を潤ませ始めた。

千桜

「ハヤテ・・・君・・・本当に、私なんかで良いんですか・・・？」

ハヤテ

「千桜さんだから良いんですよ。ボクと結婚してください、千桜さん。」

千桜

「はい、喜んで・・・これからもうよろしくお願いします、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「こちらこそよろしく申し上げます、千桜さん。」

ハヤテと千桜は、抱き合った。

あの事件から2年後、ハヤテと千桜はめでたく結婚した。

式場にはナギを初めとする面々が詰めかけ、2人を祝福してくれた。中でも一番2人を祝福してくれたのは、ワタルとソニアだった。

ソニアはあの後ハヤテと千桜に励まされ、勇気を出してワタルに告白したのだ。

その後はめでたく彼と恋人同士になり、3年後に結婚を控えている。ナギは最初困惑していたが、あの時の告白が誤解だとわかってからはハヤテと千桜のつき合いを認めてくれた。

ちなみにナギは今一樹とつき合っている。

他の面々に関しては、長くなるので飛ばす事にしよう。

ハヤテと千桜は、これからも幸せになっていく事だろう。

お互いが大切な存在にいる限り、いつまでも・・・

綾崎ハヤテと春風千桜。

2人の幸せは、これからだ。

春風千桜編・完

第10話：瀬川泉編ゝ突然の居候、委員長さんのお家『前編』（前書き）

最初に言っておきますと、今回のお話は8巻の話の分岐ルートです。本編ではヒナギクに拾われたハヤテでしたが、もしその『拾った人』が泉だったなら・・・？

言ってみれば、8巻のカバー裏にあった『もしもルート』を本当にやっってしまうというワケです。

この話はそういう話です。

では、本編へどうぞ。

第10話：瀬川泉編　突然の居候、委員長さんのお家『前編』

少年・綾崎ハヤテは、なぜか今再び路頭に迷いかけていた。

なぜかというと、ナギといろいろあつて3日間ほど帰るに帰れなくなってしまったのである。

その理由については、原作単行本7巻をお読みください。

で、マリアから3日間分の宿泊費として100万円を手渡されたハヤテだったが、彼が即座に驚いたのも無理はないといえる。

なぜなら、普通の人なら3日どころか3ヶ月は保つてであろう金額である（ハヤテなら3年）。

常人から考えればあり得ない金銭感覚であろう。

というワケで、ハヤテは100万円を手渡されたワケなのだが・・・

さすが、不幸体質というか帝にもらったお守りが原因というか・・・

雪路・氷室・ソニアに麻雀に誘われ、元同級生達の食事につき合い、他人の借金を肩代わりし、果ては壺を割って弁償代を出費・・・

気づけばいつも通り残り12円に・・・

どんな使い方したら1日で100万なくすのだろうかと思える。

そんなワケで、ハヤテは公園に1人で来ていた。

そして、しばらく放心状態だったハヤテであるが・・・

そこに、救いの天使が現れた。

その人物は傘を差し出す。

ス・・・

ハヤテ

「？」

「こんな所で何してるの？ハヤ太君・・・」

ハヤテ

「あ・・・瀬川さん・・・」

ハヤテの後ろにいたのは、ハヤテの同級生の瀬川泉だった。

セガワイズミ  
瀬川泉

「こんな所で・・・そんな格好してたら力ゼ引くよ？とりあえず寒そうだし・・・私の家に来る？」

ハヤテ

「へ？」

こうして、ハヤテは泉に拾われた。

これが、後にハヤテと泉の関係を大きく変える事になる・・・

瀬川家にて

カポーン・・・

ハヤテは今、瀬川家のフロを借りていた。

ハヤテ

「（え〜と・・・ボクはこんな所で何をしてるんだっけ？確かここは瀬川さん家ちで・・・ここは瀬川さん家のおフロで・・・ここであの瀬川さんが・・・毎日体を洗っているという・・・）」

ピチヨーン・・・

ハヤテ

「（うわぁ〜！！バカバカ！！何考えてるんだボクは！！！！）」

ハヤテは湯船に顔を沈めた。

泉

「あれ？もうおフロ上がったの？少しは温まったかな？」

ハヤテ

「え．．．ええ．．．」

泉

「でも男の子って早いんだね、おフロ。カラスの行水ってヤツかな？」

セガフサトル  
瀬川悟『泉の父（無論、オリキヤラ）』

「あ、綾崎君おフロ上がった？煉の服少し大きかったかな？」

ハヤテ

「いえ、そんな事は．．．」

悟

「そう？良かった。イヤ、それにしてもこの子女の子みたいにカワイイね。」

泉

「何、年甲斐もない事言ってるの？お父さん。」

悟

「やっぱり泉の彼氏とかじゃないの？あんなカワイイ子ならお婿さんでも全然オツケーだよ」

泉

「だからちがうって!!」

悟

「なあなあ、あの子に泉のスカート着せて良い？きつと似合つと思っただけ。」

泉

「だからそういう事は止めてっばー!!」

ハヤテ

「??」

泉

「だいたいハヤ太君には、たぶん彼女がいるんだから・・・」

ハヤテ

「（それにしても・・・どうしてこんな事になってんだっけ？色々あつて3日ほど屋敷の外に泊まる事になって・・・マリアさんからもらった宿泊費の100万が色々あつてなくなつて・・・そして瀬川さんに、拾われて・・・ああそうか。気がつくとかボクはまた・・・帰る場所のないダメな人になっているのか・・・このまま瀬川さん家に泊めてもらえると嬉しいけど・・・そんなあつかましい事は・・・」

悟

「あ・・・あのー!こ・・・これネコミミっていうんだけど・・・これを・・・ちよつと・・・」

ハヤテ

「ハ？」

泉

「!!!もー!何、恥ずかしい事してんのー!!」

悟

「はうう!!!だっ、だつてー!!」



泉

「もお！ハヤ太君こつち！！夕飯くらい食べていくでしょ？私もまだだし！！」

ハヤテ

「え？い・・・良いんですか？」

泉

「ゴメンね。お父さん、ハヤ太君みたいな男の子見るとああなつちやう趣味があつて・・・昔煉兄もお父さんの趣味の犠牲になつたし・・・」

ハヤテ

「いえ、そんな・・・でも面白くて・・・優しそうなお父さんですね。」

泉

「・・・うん。とっても優しい人だよ。」

ハヤテ

「？」

泉

「でも・・・あんな雪の中、Ｔシャツ１枚でハヤ太君何してたの？」

ハヤテ

「へ？あ・・・え」と・・・え」と・・・」

泉

「もしかして家に帰れないとか？」

ハヤテ

「！！うっ！！」

泉

「え？まさか本当に？」

ハヤテ

「えと・・・3日ほど帰るに帰れなくて・・・」

悟

「じゃあ泊まっていく！？っていうか、もう遅いし外は寒いから泊まっていきなよ！！」

泉

「イヤ・・・あの・・・この家、年頃の娘が・・・」

悟

「な？な！？」

ハヤテ

「で・・・でも良いんですか？」

悟

「良いよ！全然良いに決まっているじゃないか！！でな、こっちに泉と煉も着てくれないフリフリのドレスがあるんだけど・・・」

泉

「部屋案内するわハヤ太君！煉兄の部屋があるからそこを使って！

！  
」

ハヤテ

「・・・」

悟

「・・・泉のケチ・・・クスン・・・」

ガチャ！

ハヤテ

「うわゝ。  
」

泉

「散らかつてるけど、煉兄当分ここに戻って来ないから、好きに使  
つてね。」

ハヤテ

「っていうか、この部屋ゲームだらけですね・・・Wiiやらプレ  
ステ3やらゲームキューブやら・・・わぁ、今じゃ廃盤になったド  
リキヤスやセガサタまであるし・・・」

泉

「毎日ゲームしてばかりで、私まで巻き込むから旅行にでも行って  
来なさ〜いって言って叩き出したんだよ。」

ハヤテ

「で、その煉兄さんというのは誰なんです？」

泉

「私より2つ上の兄なの。去年卒業した白皇学院のOBだよ。極度のゲーム好きでね、いつも発売日に新型ゲーム機が届くように注文するから困っちゃって・・・」

ハヤテ

「ハア・・・そうなんですか。でもスミマセン。急にこんな・・・」

泉

「困った時はお互い様だよ。あ、そうだハヤ太君。ちょっと聞いた  
い事があつたんだけど。」

ハヤテ

「『ハヤテ』ですよ？で、聞きたい事とは何ですか？」

泉

「どうしてナギちゃんトコで執事やってるの？」

ハヤテ

「ああ、それはですね・・・親に一億五千万の借金を押しつけられ  
まして、ヤクザに売られて・・・その後何だかんだあってお嬢様に  
執事として雇ってもらって、借金も肩代わりしてもらったんですよ。」

「

泉

「・・・」

泉はしばらく放心した。

泉

「ハ、ハヤ太君・・・今の、冗談じゃないの？」

ハヤテ

「冗談でこんな事言いませんよ。その後は白皇への編入やら何やらといういろいろお世話になりました・・・お嬢様やマリアさんがいなければ、今のボクはなかったと思いますよ。お嬢様達と出会ったまでは、ボクの人生は夜逃げ三昧の毎日でしたからね・・・」

そこまで言った時、泉の瞳が潤んだ。

泉

「グス・・・」

ハヤテ

「え、ちよつ、瀬川さん！何で泣いてるんですか！！」

泉

「だって、ハヤ太君がそんな苦勞をしてきたなんて知らなくて・・・ゴメン！そんな辛い過去を思い出させちゃって・・・」

ハヤテ

「良いんですよ。瀬川さんやみんなが同情していただけるだけボクは幸せなんですから・・・」

泉

「・・・泉で良いよ・・・」

ハヤテ

「え？」

泉

「これからは私の事泉って呼んで・・・ハヤテ君。」

ハヤテ

「わかりました。これからもよろしくです泉さん。」

泉

「うん。後でまた少し聞きたい事があるから・・・じゃ、また後で来るね。」

ハヤテ

「あ、はい。」

ハヤテと泉はレベルが1上がった！

ハヤテと泉が互いを名前で呼び合えるようになった！

2人の好感度が少し上がった！

つて、何RPGみたいな説明入れてるんだろうか作者は・・・

しばらくして泉がやって来ると、ハヤテは指立て伏せをやっていた。

普通の人ではまず難しい。

ハヤテ

「3 5 3 . . . 3 5 4 . . . 3 5 5 . . . 3 5 6 . . . 3 5 7 . . .  
3 5 8 . . .」

泉

「へへ、やっぱり毎日ちゃんと鍛えているんだね。」

ハヤテ

「うわ！泉さん！！」

泉

「ハヤテ君、そんな事毎日やってるの？」

ハヤテ

「ええ、一応。幼い頃からの日課みたいなもので・・・」

泉

「フーン。あ、お邪魔するよ。でもそんなに汗かくと、もう1回おフロに入らないと気持ち悪くならない？あ、このジュースあげる。」

ハヤテ

「あ、どうも・・・(っっていうか・・・泉さん・・・おフロ上がり・・・)」

泉

「あ、勉強もしてたんだ。ホントマメだね。」

ハヤテ

「（密室・・・深夜・・・2人きり・・・ほのかに香るシャンプーの匂い・・・）」

泉

「・・・ねえ。ねえってば。」

ハヤテ

「（こ・・・これは・・・）」

泉

「ここ間違ってるよ、ハヤテ君。」

ハヤテ

「はへ!？」

泉

「はへって・・・私の話聞いてた？」

ハヤテ

「も！もちろんですよ!!」

泉

「あ、ここもちがう・・・」

ハヤテ

「（しかし・・・前から思ってたけど・・・やっぱり泉さんも・・・キレイな人だなあ・・・）」

泉

「この問題は最初にね・・・この方程式を・・・ん？」



ハヤテ

「（イ・・・イカン！！変に意識すると・・・顔が赤くなる・・・）

」

泉

「・・・」

泉は缶ジュースをハヤテの頬に当てた。

ピトッ！

ハヤテ

「ウヒヤア！！」

泉

「ねえ？マジメに聞く気あるの？」

泉は少し怒っている。

ハヤテ

「ス！スミマセンスミマセン！！と・・・！ところで泉さんこそ聞きたい事があるって！な・・・何ですかそれは？」

泉

「え？あゝ、うん・・・その・・・え」と・・・そんな事よりこんなに間違えて、今度の試験どうするの！？」

ハヤテ

「あ！？はい！！」

泉

「私が少し見てあげるからしっかり勉強しなさい!!」

ハヤテ

「は!はい!!」

泉

「（聞きたい事・・・私の聞きたい事は・・・あのバレンタインの日の事・・・）」

原作ではヒナギクでしたが、この話の主演は泉。

すなわち、ヒナギクが見ていたあのシーンを泉が見ていたという事になるのだ!

泉

「（告白したあの子があんなに喜んでたって事は・・・今・・・あなたはあの子とつき合ってるの?・・・って・・・!そんな事聞いてどうするのよ!!!）」

ハヤテ

「（せっかく泉さんが勉強を見てくれているんだ!ここはがんばらないと!!!）あの、できましたけど・・・どうでしょう?」

泉

「・・・もう良いよ・・・」

ハヤテ

「え?」

泉

「こんな事、今さら何の意味もないから・・・お休み、ハヤテ君。」

ハヤテ

「・・・（そんなにヤバいのか・・・ボクの成績・・・）」

翌日の朝・・・

泉

「ん・・・ん・・・」

悟

「泉、綾崎君起こして来て。」

泉

「はい。」

ガチャ！

泉

「おいハヤテ君。朝ごはんだよ。・・・って・・・何、徹夜で勉強してるの？」

ハヤテ

「イヤ・・・だって成績が・・・」

誤解は些細な事から生まれていくのです。

その誤解は必然である。

なぜなら・・・

『想いは伝えられた？』と聞いて、『は、はい！』と笑顔で言われたなら・・・

当然、ラブラブな展開になる事を想像するのは当然の流れ。

まさかそれが、告白はしたが結果は保留という、ヘタレ極まりない展開になっているなど想定外。

だから、あのバレンタインから1週間・・・

少女・瀬川泉の心境は複雑だった。

泉

「（何で私が動揺してるの？そもそもハヤテ君が誰とつき合おうと関係ないじゃない。元々何とも思っていないんだし・・・だからこれは何というか・・・友達に彼氏ができたとかそういう類の心境であって、別に・・・何でもないんだから・・・）」

で、現在少女を1週間も悶々とさせた当人は・・・

ハヤテ

「イヤゝ．．．泉さんの作る朝ゴハン、おいしいですね。」

ヘラヘラ．．．

泉

「（なぜかな？あのゆるんだ笑顔を見てると、軽く殺意がわいてくるんだけど．．．全く．．．人の気も知らないで．．．）」

ハヤテ

「？えつと．．．泉さん？ボク、何かマズい事を．．．？」

泉

「別に。おかわりいる？まだたくさんあるよ。」

ハヤテ

「あ．．．じゃあ．．．（何だろ？よくわからないけど．．．何か早く原因を突き止めないと、色々マズいにおいがする．．．）」

泉

「ところでハヤテ君。今晚はどうするの？行く所ないならまた泊めてあげるよ？お父さんも泊まってほしいみたいだし。」

ハヤテ

「あ．．．ご迷惑でないなら．．．その．．．」

泉

「別に迷惑とかじゃないけど．．．いいの？」

ハヤテ

「へ？何がですか？」

泉

「何って、そりゃ・・・いいの？カワイイ彼女（西沢さんだったかな？）はほったらかしで・・・」

ハヤテ

「イヤア、でも・・・（お嬢様は）しばらく放っておいた方が良かったというか、（全裸を見られて恥ずかしがっているのに）チヨコマカ構うのも男としてどうかと思うので。」

泉

「（告白されたからここはあえて冷たくしてってヤツ・・・？）何か意外と考えてるんだね。」

ハヤテ

「ええ、ぬかりはありませんよ。」

泉

「でも今日学校だよ？服はどうするの？さすがに私服はマズいよ。」

ハヤテ

「ああ、その点はご心配なく。」

ハヤテと泉は、白皇学院に登校した。

白皇学院

ハヤテ

「こんな事もあるつかと、常に執事服と制服のスペアは学校に隠してあります。」

泉

「だからって生徒会室に隠すのはダメなんじゃない？ヒナちゃんに怒られるよ？」

ここから先の事は少し簡潔に。

・ 三千院家に99万9988円、つまりほぼ100万が帰って来て・

マリアがハヤテの様子を見ようと変装して白皇に行つて・・・

ちょっとしたアクシデントでハヤテがマリアを押し倒しかけて・・・

そこを泉に見られて・・・

ハヤテはただで泉家のお世話にはなるまいと・・・

手伝いを決意し執事服に着替え直した。

ハヤテのレベルが1上がった！

ハヤテは気合いを入れ直した！

またこの説明か・・・

第11話：瀬川泉編　突然の居候、委員長さんのお家『中編』

悟

「わあ、お手伝い？」

ハヤテ

「え．．．え」と．．．お父様．．．何かイメージ変わりました？」

悟

「わかる？理髪店行って来たんだ」

ハヤテ

「理髪店って．．．（あんなに変わるの．．．？）」

悟

「んじやくオレ、今日急な夜間勤務が入ったから．．．泉の夕食でも作ってもらえるかな？一応夕方には煉も帰って来るらしいから、2人分頼めるかな？」

ハヤテ

「はい！任せてください！！」

泉

「（全く．．．ハヤテ君ったら．．．彼女がいるっていうのにちがう女の子と．．．あんな事を．．．ああ見えて意外と、女の子にだらしないのかな．．．だったらちようど家にいるんだし、ここはガッソンと言ってやらないと．．．白皇学院委員長さんレッドの名折



れ!!」

ハヤテ

「あ、お疲れ様です泉さん。」

泉

「!む・・・!ハヤテ君・・・!!」

ハヤテ

「今、帰りですか?委員長も大変ですね。」

泉

「ハヤテ君あなた・・・」

ハヤテ

「ところで泉さんは苦手な食べ物ってありますか?」

泉

「へ?苦手な物?・・・そだね・・・梅干しとか・・・酸っぱいのはちょっと・・・」

ハヤテ

「じゃあ好きな物は?」

泉

「へ?す・・・好きな物?・・・カ・・・カレーと・・・ハンバーグ・・・」

ハヤテ

「ハハ、何だか随分男の子みたいな好みですね。」

泉

「な！何！良いじゃない！カレーもハンバーグもおいしいんだよ！  
！大体何なの！そんなの聞いてどうする気？」

ハヤテ

「いえ、お父様に夕飯の仕度を頼まれたので、やはり泉さんの好きな物を作ろうかと・・・」

泉

「え？それってもしかして・・・」

ハヤテ

「はい。お父様は急な夜間勤務との事です。」

泉

「え・・・じゃあまさか今晚2人つきりなの？」

ハヤテ

「いえ、夕方にはお兄様が帰って来るらしいですよ。まあ2人きりだからって、泉さんに何かする勇氣のある人は少ないでしょうけど。」

泉

「な！それどういう意味！？」

ハヤテ

「だって何かしたら木刀でボコにされそうですし・・・」

泉

「ヒナちゃんと一緒にしないでよ、失礼だね！！あ！ダメだよカレ  
ーはそっちの激辛じゃないと！！」

ハヤテ

「意外と味覚があの子似なんですね。」

泉

「そんなんじゃないよ！私は大人の味を楽しみたいだけだよ！！も  
お！サツサと帰るよハヤテ君！！」

ハヤテ

「はいはい泉さん」

「（クツッ！！何だ、その仲良しハイスクールな会話はああ！！）

」

手近に皆様の声を代弁する突っ込みがいなかったので、スーパーの  
売場主任（独身・42歳 例のLの人似）に突っ込んでもらいまし  
た。

瀬川家

泉

「（全く・・・このままじゃハヤテ君のペースに飲まれっぱなしだ  
よ。どうにか煉兄が帰って来るまでに、ガツンと言ってやらない  
と・・・委員長さんレッドの威厳が・・・だったら・・・！！）」

ハヤテ

「（カレーにハンバーグ・・・どちらも単純なようで奥深い料理だ・・・）しかし、三千院家の執事として・・・ここは持てる技術の粋を尽くして最高のカレーとハンバーグを作ってみせる！！」

泉

「待ちなさいハヤテ君！！」

ハヤテ

「え？泉さん！？」

泉

「ただ作ってもらっただけなんて我慢ならないから・・・私も一緒に作るよ！！」

ハヤテ

「え？でも・・・」

泉

「いいの！なら分担しよう。ハヤテ君がカレー、私がハンバーグ！」

ハヤテ

「わ、わかりました！異種格闘義戦みたいな料理対決ですが、受けて立ちましょう！！」

泉

「別に勝負とかじゃないよ・・・？」

ハヤテ

「ちがうんですか？ボクは負けず嫌いの泉さんの事だからてつきり・  
・」

泉

「誰がよ！ヒナちゃんと一緒にしないで！！ホラ、ハヤテ君はそっ  
ちで野菜切って！私はこっちでハンバーグの下拵えをするから！！」

ハヤテ

「あ・・・はい・・・泉さんはセロリ食べれます？」

泉

「当然だよ！！どこまで子供扱いする気！？」

ハヤテ

「わゝタマネギ切るの上手ですねゝ泉さん。」

泉

「バカ。あ、そっちのニンジン取って。」

ハヤテ

「はい」

「（クツソゝ！！何だ、その新婚ホヤホヤみたいな会話は！！）」

手近に皆様の声を代弁する突っ込みがいなかったのでカラス（ハッ  
シー・4歳）に突っ込んでもらいました。

ハヤテ

「さあ！できましたよ泉さん！！ちょっと味見してみてください！  
」

ドン！！

泉

「フ！こつちもできたよ！！あまりのおいしさに震えると良いよ！  
」

バン！！

パクッ！

ハヤテ・泉

「・・・」

ピシッ！

ハヤテ

「う・・・うまい！！この肉の粗挽き加減・・・そして絶妙のコネ  
具合・・・そして肉汁をもらさず中に閉じこめている！！」

泉

「うわ、これおいしい・・・！！辛みの奥に隠された深いコク・・・  
これはタマネギ！？そして隠し味はビターチョコだね！！」

ハヤテ・泉

「・・・」

泉

「さ．．．さあ．．．料理マンガみたいな解説も恥ずかしくなってきたし．．．」

ハヤテ

「食卓の準備でもしますか．．．」

「（料理マンガみたいな解説が恥ずかしいんじゃないかって．．．オマエ達の妙なラブラブっぷりが恥ずかしいんじゃないか！）」

手近にもう全く皆様の声を代弁できそうな生物がいなかったので、観葉植物（サボテン・14歳）に突っ込んでもらいました。

ハヤテ

「それにしても．．．お兄様帰って来ませんね．．．」

泉

「本当だね。」

ハヤテ・泉

「．．．」

シン．．．

泉

「（でもハヤテ君って．．．本当に料理上手なんだね。手つきをみれば一目瞭然だよ．．．そしてあの料理を．．．彼女のために．．．作ってあげるのかな．．．）．．．ハヤテ君、お茶入れるね。」

その時、ハヤテもポットに手を伸ばしたため、2人の手が触れ合った。

ハヤテ・泉

「あ・・・」

しばしの沈黙。

ハヤテと泉はお互いに離れた。

バツ!!

ハヤテ

「うわああ!!ス!スミマセン!!」

泉

「い・・・いえ!こちらこそ!!」

ハヤテ

「い!今のは何というか、あの・・・ふ、不可抗力というかその・・・」

泉

「い・・・いえ!こちらこそおかまいなく・・・!!」

ハヤテ

「・・・へ?」

泉

「あ・・・」

それから1時間後。



ハヤテ

「イヤゝそれにしても・・・お兄様遅いですね。」

泉

「本当だね・・・」

ハヤテ

「（イ・・・イカン・・・これでは間が保たん・・・これは何か・・・気の利いた話題を振らないと・・・）」

泉

「（ああもう・・・何でこんな事になってるの・・・だいたいこれというの煉兄が帰って来ないせいなんだから・・・！！）」

ハヤテ

「（なら、お嬢様とは鉄板で盛り上げられるこの話題で！！）あ、そういえば、泉さんはアニメとかマンガのラストで納得いかなかった事ってありますか？」

泉

「（全く・・・本当に帰って来たらただじゃおかないからね・・・！！）」

ゴゴゴゴゴ

ハヤテ

「（ああ！！何か怒っていらっしやる・・・！！お嬢様となら一晩語り明かせるネタだったのに・・・！！）」

泉

「（でもよく考えたら、ハヤテ君彼女いるんだよね・・・だったら・・・そんな心配する必要もないのかも・・・。・・・彼女・・・か・・・）あ、そうだハヤテ君。おフロ入る？」

ハヤテ

「え？い、一緒に・・・ですか？」

泉

「んなワケないでしょ？・・・一緒に・・・入りたい？」

ハヤテ

「・・・へ？ええ！？あや・・・いああ・・・おぼへあ！！？」

泉

「日本語でしゃべってくれないかな？それじゃあ・・・あの西沢さんって子と私と美希ちゃんと理沙ちゃんとヒナちゃんとマリアさんの6人の内、誰と一緒に入りたい？」

ハヤテ

「・・・」

カツポーン・・・

ハヤテ

「イ・・・イヤイヤ！！そ！それはその！！」

泉

「だったらウチの兄が良い？」

ハヤテ

「あ……さすがに男同士はちょっと……」

泉

「……フ。全く……ハヤテ君、少し軽薄すぎるんじゃないかな？」

ハヤテ

「え？」

ハヤテ

「全く……恋人がちゃんというってのにそんなフラフラして……そんなんじゃない彼女が悲しむよ？」

ハヤテ

「……いせんけど……」

泉

「！」

ハヤテ

「あの……ボクに恋人なんていせんけど……」

泉

「……え？いないって……何が？」

ハヤテ

「いえ……ですからボクに恋人なんて……」

泉

「ハ？え！？いないってどういう事！？あの西沢さんって子とつきあってるんじゃないの！？」

ハヤテ

「ええ！？な、な、何でボクが西沢さんときつきあっているんですか！？」

泉

「ウソついたってダメだよ！！だってハヤテ君あのバレンタインの時彼女に告白されて・・・」

ハヤテ

「こ、告白はされましたけど・・・返事はしてないっていうか・・・返事は・・・言わなくて良いって言われたから・・・それでその・・・返事はできなかったっていうか・・・」

泉

「・・・（え？じゃあ何？2人は本当につき合ってなくて・・・私が1人で勘違いしてて・・・それで・・・）」

恋人のいない男を・・・

夜、家に連れ込み2人きり・・・

泉

「！！！」

実は瀬川泉は、根本的な部分でマジメなのである。

少なくとも、花菱美希と朝風理沙よりは。

なので、恋人がいるなら2人きりになっても間違いは起こらないだろうと思っていた。

泉

「・・・」

ハヤテ

「あの・・・泉さん・・・？」

泉

「ハ！はい、何でしょう！ー！」

ハヤテ

「イヤ・・・その・・・」

泉

「あ、そうだハヤテ君！何かアイス食べたくない？うん！食べたいよね！ー！何かスゴく暑いし、私、買って来てあげるよ！ー！」

泉はそう言い終わると同時に走り出した。

ハヤテ

「あ・・・！！（何か・・・避けられたのかな？）」

少年の誤解が始まった。

「ありがとうございました。」

ガーッ・・・

泉

「（ハ）、何か調子狂うな・・・まさかつき合っ  
てなかったなんて・・・でも何でかな？  
少しだけ・・・その・・・ホッ  
としたって感じが・・・）」

そんな事を思う泉の背後に、何者かが近づいていた。

そして、泉の肩に手を置く。

ポン！

「だ〜れだ？」

その瞬間・・・

泉

「イヤアアアアッ！！！」

泉は何と、一本背負いでその影を投げ飛ばした。

ブンッ！！

ドウッ！！

「ギャフ！！！」

泉

「ふざけた事しないでくれる？煉兄・・・」

泉は自分が投げ飛ばした人物をにらみつけた。

瀬川煉『泉の兄』

「イテテテテ・・・悪い悪い、泉！久々だったから、ちょっとさあ・・・」

煉は頭をさすりながら立ち上がった。

泉

「やって良い事と悪い事があるって学校で習わなかった？」

泉は煉をにらみつけた。

煉

「ヒイ！！スイマセンスイマセン・・・」

煉は泉に平謝りする。

兄の威厳はどこへやら。

煉

「それより泉さあ、今家に綾崎ハヤ次郎って男の子が来てるんだって？」

泉

「『綾崎ハヤ太』だよ、煉兄。」

それもちがうって。

泉  
「じゃなくて、ハヤテ君だよ・・・で？帰って来ていきなり何の話なの？」

泉は煉に聞いた。

煉

「ああ、お父さんに聞いたんだけど、その人泉の友達なんだって？」

泉

「うん、まあそんなトコだよ。」

煉

「そつかそつか、泉にもようやく春が・・・」

泉

「何言ってるのかな？煉兄は。」

煉

「まあ話は家に帰ってからしようや。オマエ、アイス買いに来てたんだろ？」

泉

「あ、そうだった。早く帰らないと溶けちゃう！」

そう言つと、泉は走り出した。

煉

「待って、お兄ちゃんを置いてきぼりにするなあゝ！」



煉も急いでついて行った。

瀬川家にて

ハヤテ

「じゃあ、この人がお兄様ですか。」

泉

「そだよ。」

煉

「泉の兄の瀬川煉だ。よろしくな、綾崎ハヤ三君。」

ハヤテはコケた。

ズテッ！

泉

「『ハヤテ』だって言ってるでしょこのバカ兄が！！」

泉は煉をはたいた。

バシィ！！

煉

「イデ！！」

ハヤテ

「楽しそうだな。」

泉

「これが楽しそうに見えるの？ハヤテ君は。」

ハヤテ

「はう！！スイマセンスイマセン・・・」

泉

「イヤ、別に謝らなくても良いんだよ・・・？で、煉兄何の用で帰って来たの？」

煉

「あ、そうだった。お父さんから泉の男友達が来ると聞いてね、どんな子が確かめに来たんだよ。泉の彼氏としてふさわしいかどうかを見極めるためにね！！」

泉

「イヤイヤ、私達まだそんな関係じゃないんだけど・・・」

煉

「皆まで言っな、わかってる！悩めるカップルであるお2人の恋路を、この恋愛テクニシャンである兄がお助けしようじゃないか！！」

泉

「彼女いない歴18年の煉兄にできるワケ？」

グサァ！！

煉

「うっ！それは言わないお約束だよ・・・まあとにかく・・・  
泉との仲を深めるためにも、明日2人でデートしなさい！お兄ちゃん  
がしっかりフォローして・・・」

泉

「煉兄のフォローはいらないよ。自分でできるし。」

グッサア！！

煉

「うっ、ヒドいよ泉い・・・」

泉

「ヒドくない！！というワケで、明日よろしくね、ハヤテ君」

ハヤテ

「あ、はい・・・（泉さんって、意外と兄に厳しい人だったんだあ・  
・・・）」

そんなワケで、泉とデートする事になったハヤテ。

ハヤテと泉の明日はどっちだ！？

ハヤテ

「では泉さん、行きましようか。」

泉

「そだね、ハヤテ君。」

ハヤテと泉は、一緒に白皇を出た。

その2人の様子を、美希と理沙が見ていた。

理沙

「妙だ・・・」

美希

「妙ね、理沙。」

理沙

「あの泉がハヤ太君を正しい名前で呼んでいる・・・しかも、何やら楽しそうだ・・・」

美希

「もしかして、2人はデートするんじゃないかしら・・・」

「何、デートだと!？」

理沙・美希

「うわ!？」

驚いた理沙と美希が振り向くと、そこにはナギとヒナギクがいた。

理沙

「あ．．．ナギ君。」

美希

「あ．．．ヒナ。」

ナギ

「ハヤテのヤツ．．．いつの間にあんなに瀬川と親しく．．．」

ヒナギク

「（ハヤテ君．．．少しずつ私との距離を縮められていると思ってたのに．．．）」

ナギ

「こうしちゃおれん！2人を追うぞ！！」

ナギが走り出し、それに美希達も続く。

ナギ達が外に出ると、ちょうどハヤテと泉がタクシーに乗り込んでいる所だった。

タクシーはそのまま発進する。

ナギ達はすぐに近くに來たタクシーを飛び止め、乗り込んだ。

ナギ

「前の車を追ってくれ！！」

こうして、ナギ達4人によるハヤテと泉尾行作戦が始まった。

第12話：瀬川泉編　突然の居候、委員長さんのお家『後編』

どこかの遊園地

ハヤテ

「さて、着きましたが・・・何から乗ります？」

泉

「そだね、定番のジェットコースター！」

ハヤテ

「この遊園地にありましたっけ？」

泉

「あ、ジェットコースターじゃなくて急流下りだったね。二八八」

ハヤテ

「じゃあ、行きましょう。」

泉

「うん！」

ハヤテと泉は、急流下りに向かった。

ちょうどその頃、ハヤテ達を追って来たナギ達も遊園地に着いていた。

ナギ

「何とか追って来たが・・・どうやって2人を監視しようか？」

ヒナギク

「そうね・・・全員そろって行動すると見つかった時ヤバいし・・・かといってこのままここにいても見失うし・・・」

美希

「だったら、2手に分かれて探すというのはどう？そして、2人を見つけたら連絡を取りながら監視するの。」

理沙

「うん、それが一番確実な手だろうな。そうしよう。」

ナギ

「じゃあ、解散。」

ナギは理沙と、ヒナギクは美希と行動する事になった。

同じ頃、ハヤテと泉は次のアトラクションを探していた。

ハヤテ

「じゃあ泉さん、次はどこに行きますか？」

泉

「そだね～。オバケ屋敷なんてどうかな？」

ハヤテ

「え？ 泉さんオバケ怖くないんですか？」

泉

「怖いよ？ でも、ハヤテ君と一緒にいるから大丈夫かな？ って．．．」

ハヤテ

「『かな？』って．．．」

泉

「さ、早く行こ」

ハヤテ

「あ、はい。」

ハヤテは泉と一緒に、オバケ屋敷へと入って行く。

その時、理沙とナギが2人を見つけた。

ナギ

「あ、ハヤテと瀬川だ！」

理沙

「ホホッウ．．．随分と仲が良いようだな．．．」

ナギ

「グヌヌ．．．ハヤテめえ、私以外の女にデレデレと．．．」

理沙



「じゃあ、私達も乗り込むか？ナギ君。」

ナギ

「当然だ！行くぞ理沙ポン！！」

理沙

「り、理沙ポンって・・・」

ナギと理沙も、オバケ屋敷へと入って行った。

その頃、美希とヒナは・・・

美希

「はい、ヒナ。あゝん」

ヒナギク

「あ、あゝん・・・」

美希

「はい」

パクッ。

ヒナギク

「もぐもぐ・・・」

美希

「おいしい？」

ヒナギク

「う、うん。ありがとう・・・」

美希

「じゃ、じゃあ、今度は私に・・・」

ヒナギク

「はいはい」

お互いに食べさせ合いっこをしていた。

泉

「きゃー！きゃー！！きゃー！！！！」

泉はさつきから、ハヤテに抱きつきながら悲鳴を上げている。

ハヤテ

「い、泉さん・・・そんなくっつかずに・・・」

泉

「だって、怖いものは怖いのだ」

ハヤテ

「ハ、ハア・・・」

泉

「ホラホラ、早く出口まで走るのだ」

ハヤテ

「はいはい・・・」

ハヤテは泉の手を引っ張りながら、出口まで走った。

理沙

「あ！ハヤ太君が・・・ナギ君、私達も早く・・・」

理沙が振り返ると、ナギは気絶していた。

その後もハヤテと泉のデートは順調に進み、デートは終盤を迎える。

2人は入場ゲートから外に出た。

ハヤテ

「今日は1日楽しめました。泉さん、ありがとうございました。」

泉

「うん、私も楽しかったよ。1日デートのおつき合いありがとうね。」

「

泉は上機嫌だ。

泉

「じゃあ、私は帰るね。」

ハヤテ

「泉さん、本当に送って行かなくて良いんですか？」

泉

「うん、私は1人でも大丈夫だよ。（ハヤテ君とのデートが楽しかったから、余韻に浸りたいとは言えないしね・・・）」

泉は少々赤面していた。

泉

「じゃ、じゃあねハヤテ君！」

泉は走って行った。

ハヤテ

「（泉さん、どうしたんだろ・・・？）！！」

と、そこでハヤテは泉に近づいている車に気がついた。

ハヤテ

「泉さん、危ない！！」

泉

「え！？」

泉はハヤテの声に気がつき、ハヤテが指差した方を見た。

すると、車が迫って来ていた。

今にも泉を引かんとする勢いだ。

泉

「・・・!!」

泉はたじろぐ。

そして、泉に当たろうとしたその瞬間・・・

ハヤテ

「泉さん!!」

ハヤテが飛び出し、泉を突き飛ばした。

ドンッ!!

泉

「キャッ!!」

泉を突き飛ばしたハヤテは、そのまま車に突き飛ばされた。

ドカツ!!

ハヤテは宙を舞う。

そして、そのまま地面に叩きつけられた。

ドッ!!

「チッ!!」

運転手は舌打ちすると、車を急発進させて走り去った。

ブオオオオ・・・

泉

「キヤアアア！！ハヤテ君！！」

泉はハヤテに駆け寄った。

泉

「ヒドい血・・・」

ナギ

「ハ、ハヤテ！！」

ヒナギク

「大丈夫！？」

隠れていたナギ達も駆け寄って来た。

泉

「ナ、ナギちゃん達！？どうして・・・」

ナギ

「ハ、ハヤテが瀬川とデートするって聞いたから気になって・・・  
そんな事より、今はハヤテを病院に運ぶ事が先だ！！」

美希

「じゃあ、私が病院を手配するわ！理沙は救急車を！！」

理沙

「わかった!!」

美希は自分が知っている病院に電話をかけた。

理沙は119番に電話をかける。

泉

「しっかりして・・・ハヤテ君・・・」

泉はハヤテに人工呼吸をしていた。

某病院

ハヤテは美希が知っている病院へと担ぎ込まれた。

ナギ

「せ、先生！ハ、ハヤテは・・・？」

ナギは泣きそうになりながら言う。

「心配ありませんよ。体を軽く打った程度です。今からしばらく安静にしていれば、直に良くなりますよ。」

女の先生は微笑みながら言った。

ナギ

「そ、そうですね・・・」

泉

「よ、良かったあ・・・」

ナギも泉も泣きそうである。

「おそらく、日常からかなり体を鍛えていたのでしょう。驚異的な体力です。しかし、ひき逃げなんて本当にヒドいですよね・・・」

泉

「先生・・・実はただのひき逃げじゃないんです・・・車を運転していた人の本当の狙いは・・・私なんです!!」

ナギ

「な、何だって!!」

ナギは驚いた。

ヒナギク

「どういう事なの、泉!？」

ヒナギクが聞いた。

泉

「私、走り去った車の運転手の顔を一瞬だけ見たけど、実は見覚えがあったの・・・あの人は、私をずっとつけ回していたストーカーなの・・・」

ナギ・ヒナギク・美希・理沙



「な、何！？」

ナギ達は、驚愕した。

理沙

「ス、ストーカーってどういう事だ！？泉！！」

理沙は泉に詰め寄った。

泉

「実は私、ここ2週間ほど見知らぬ男の人にストーカーを受けていた。不審な手紙は来るし、無言電話なんて毎日・・・4日前なんて、いきなり夜道であの人に追いかけられて・・・」

美希

「そんな・・・何てヒドい・・・」

泉

「ちょうどハヤテ君もいる事だし、ハヤテ君に相談しようと思ってたの・・・」

ナギ

「そうか・・・しかし、何てヒドいヤツなんだ・・・」

ヒナギク

「そんなヤツを野放しにはしておけないわね・・・」

理沙

「私達もストーカー逮捕に協力するぞ！！」

泉

「みんな・・・ありがとう・・・」

泉は瞳が潤んだ。

ヒナギク

「じゃあ、早速近所の人に聞き込みをするわよ!」

美希

「ええ!」

ヒナギクと美希は走って行った。

ナギ

「私も行こう。理沙ポンは瀬川と一緒にここでハヤテの看病をして  
くれ!」

理沙

「だから理沙ポンは止めてってば・・・」

ナギも走って行った。

泉

「理沙ちゃん!私も行くよ!」

理沙

「泉はここで私と一緒にハヤ太君の看病をするんだ!」

泉

「で、でも・・・」

理沙

「でもない！泉はハヤ太君の事が好きなんだろ！！」

泉

「え・・・理沙ちゃん、気づいてたの？」

理沙

「当たり前だ！何年泉とつき合ってると思ってるんだ？オマエの考えてる事ぐらい、声聞けばわかるさ・・・」

泉

「美希ちゃんとヒナちゃんも気づいてるのかな？」

理沙

「さあな？ヒナはともかく美希は気づいてると思うよ？後、ナギ君もな。」

泉

「ナギちゃんも？何だか悪いなあ・・・」

理沙

「何を言ってるんだ、泉。恋愛をした事があまりない私が言つのも何だが、素直にならないと恋愛は損するよ？」

泉

「そうだよね・・・私、自分の気持ちに正直になる！ハヤテ君が元気になったら、私の口から彼に告白する！！」

理沙

「ウム、がんばれ！」

泉

「私、ちよつと飲み物買つて来るね！」

泉は走つて行つた。

理沙

「素直になれ、か・・・私も人の事言えないよな・・・」

理沙はそう言いながら、生徒手帳を見た。

手帳には、かつてハヤテの両親に金を貸したヤクザの1人、柏木の写真があつた。

理沙

「私も素直になつてみようかな・・・」

理沙は赤面しながら、そう思った。

泉は自販機の前に来ていた。

周囲に人気はない。  
ひっけ

泉

「ハヤテ君の欲しそうなのは、これかな？」

泉はスイッチを押し、ハヤテの分の飲み物を買った。

泉

「私はこれっど．．．」

泉は自分の分も飲み物を買った。

泉

「ハヤテ君が目を覚ましたら、真っ先に告白しよう．．．」

泉はハヤテへの想いで心が一杯だった。

そんな彼女が、気づくハズもなかった。

自分の背後に、怪しい影が迫っている事を。

そして、次の瞬間．．．

泉

「ムゲツ!？」

泉は後ろから口を塞がれた。

泉

「うっっ!!」

泉は必死にもがいたが、次第に目がトロンとしてきた。

泉

「うっ．．．」

泉はドサツと倒れた。

それと同時に缶飲料2本が床に落ちる。

「フッフ・・・」

影は不敵に笑うと、泉を背中に抱えて連れ去って行った。

理沙はハヤテの看病をしながら泉を待っていたが、2時間以上経っても彼女は戻って来ない。

理沙

「遅いな、泉のヤツ・・・」

理沙は缶コーヒーを飲みながら、そうつぶやいた。

すると、今まで昏睡状態だったハヤテが目を覚ました。

バチッ！

ハヤテ

「・・・」

ハヤテは起き上がる。

理沙

「ハ、ハヤ太君？やっと起きたのか・・・どうしたんだ？」

ハヤテ

「泉さんが、危ない・・・」

理沙

「何だつて！？泉が！？」

ハヤテ

「朝風さん、ちょっと外に出ていてください。着替えますので。」

理沙

「あ、ああ。」

理沙は病室の外に出る。

5分後、ハヤテは着替え終わった。

ハヤテ

「入って良いですよ。」

理沙は中に入る。

ハヤテ

「今から泉さんを助けに行きます。朝風さん、背中に乗ってください。」

理沙は背中に乗った。

理沙

「ハヤ太君、泉を助けに行くと言っても、場所がわからなきゃ助けには・・・」

理沙が言い終わる前に、ハヤテは窓から飛び出した。

ハヤテ

「疾風の・・・如く!!」

理沙

「キャ、キャアアッ!？」

ハヤテは理沙を背負ったまま、空を飛んで行った。

泉

「ん・・・」

しばらくして、泉は目を覚ました。

泉

「じじ、どじ・・・?」

「お、目が覚めたようだな?」

泉

「え?」

泉が振り向くと、1人の男がニヤつきながら彼女を見ていた。

ここで、泉は自分の手足が縄で縛られている事に気づいた。



泉

「あなた、私をつけ回してたストーカーだね!？」

泉は怒ったように言った。

「そうだ、オレがストーカーだよ。表向きは医者だがね。」

泉

「前に私を治療した人でしょう? やけに何度も連絡先を聞いてきたもんね。」

「フツ、やっと見つけた理想の女だ。手に入れるためならどんな手段でも使うさ。」

泉

「ストーカー行為を繰り返したり、こんな誘拐まがいな事をしてでもってワケ? 最低だね。」

「何とでも言いな。今からオマエはオレの女になるんだからな。」

男は笑った。

泉

「そうはいかないよ! 私には頼りになる人がいるの! 呼べば必ず助けに来てくれるわ!!」

泉は言った。

「フーン、こんな状態になってもか?」

そう言つと、男は泉の口にガムテープを貼つた。

泉

「んっ、んんっ!!」

「さて、そろそろ・・・」

男は泉に近寄つて行く。

泉は力一杯叫んだ。

泉

「んんっ!!（ハヤテ君っ!!）」

その時だった。

少年の声が聞こえてきたのは。

「そこまです!!」

「な、何!？」

男が振り向くと、そこにはハヤテと理沙がいた。

ハヤテ

「泉さん!!」

理沙

「泉!!」

泉

「（ハヤテ君・・・理沙ちゃん・・・）」

泉は瞳が潤む。

「チツ、せつかくここまで来たんだ。邪魔されてたまるか！」

男はハヤテと理沙に向かって行く。

しかし、ハヤテは男の手を取り、投げ飛ばした。

ガッ！

ブンッ！！

ドウッ！！

「ぐわっ・・・」

男が気絶すると、理沙が縄で男を縛った。

ハヤテは泉に駆け寄る。

ハヤテ

「大丈夫ですか、泉さん？」

ハヤテは縄を解きながら言った。

泉

「うん、大丈夫。どこもケガしてないよ」

縄を解かれた泉は、いつもの笑顔で言った。

ハヤテ

「そうですか。」

ハヤテはホッとした様子だ。

泉

「あの、ハヤテ君・・・」

ハヤテ

「はい、何でしょうか？」

泉

「実は私、ハヤテ君の事が・・・」

泉がその先を言う前に、ハヤテが彼女を抱き締めていた。

泉

「ちよつ、ハヤテ君!？」

泉は慌てた。

ハヤテ

「泉さん、その先は言わなくて良いです。ボクもあなたが好きですから。」

ハヤテは笑顔で言った。

泉

「ありがと、ハヤテ君。これからもよろしくね」

ハヤテ

「はい、泉さん」

ハヤテと泉は、理沙の目の前で抱き合った。

デートから2年後、泉と理沙は同時に結婚式を挙げる事になった。

理沙のお相手は、あの柏木という男だった。

理沙が不良に絡まれているところを救ったのがキツカケで、つき合う事になったという。

ハヤテと付き添いで来たナギは、彼が理沙の相手である事に驚いていた。

その後式は滞りなく進み、2組は誓いの儀式を挙げる。

2組がキスを交わした時、周囲から祝福の言葉が投げかけられた。

ふとしたキツカケから誕生した、2組のカップル。

4人はこれからも、幸せな家庭を築いていく事だろう。

綾崎ハヤテと瀬川泉。

朝風理沙と柏木。

2組の未来に、幸あれ。

瀬川泉編・完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8782c/>

---

ハヤテのごとく！短編集～ヒロインは変わる、時のように～つながりを持たな

2010年10月9日07時05分発行